
私たち、ねじれた家で同居しています。

ばーでいー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私たち、ねじれた家で同居しています。

【Nコード】

N5191I

【作者名】

ばーでいー

【あらすじ】

親戚から管理を兼ねて託された古い洋館に住んでいる独身お一人様の私。ある晩帰ってきたら、知らない外人がいてびっくり。お互いに家の所有者であることを主張するけど、なんだかおかしいことに気がついて・・・

あなた誰？

家に帰ったら、リビングのソファに外人が座って、何か本を読んでいた。と言ったら、驚くだろうか？座っていたのだ。そして、何か真剣に読んでいたのだ。不法侵入・・・すぐに外に出て助けを呼ばないと・・・と思った矢先に当の本人と目があつた。年のころは35歳から40歳の間くらいだろうか？目が青くて金髪だった。

「君、誰？」と先方は日本語で聞いてきた。誰？って・・・

「ここは私の家。あなた、誰？」と質問を質問で返した。

「ここは僕の家だよ。君、誰？どうやって入ったの？」とまた質問で返された。

「だから、ここは私の家で、あなたこそ誰？」

「僕はDaniel Clarkだけど？」知ってるでしょ？という口調で名乗った。

「私は・・・」

「どうやって入ったの？ここは僕のプライベートだよ。」

「だから、ここは私の家。」とバカの一つ覚えのように言った。そう答えながらも、Daniel Clark ってイギリス人の俳優で・・・アンジェリーナ・ジョリーと共演してたよなあとちよつと思ひ出した。

「あなた、俳優の？」どうして、イギリス人俳優が私の家にいるんだ？

「そうだよ。役者だよ。ところで、君、誰？人を呼ぶよ。」

「人を呼ぶのは私のほう。なんで、私の家にいるの？」

「何を言っているんだよ。ここは僕の家。最近買ったんだよ。」

「私も最近、この家に引っ越してきたのよ。」

「変なことを言うなあ。」

「違う。変なのはそちらでしょ？」会話は平行線をひたすら辿っている。眉をひそめて、クラーク氏 は何か引っかかっているという

顔をしている、私もなんかヘンだと思った。

「ねえ。クラークさん、あなた日本語喋れるの？」

「いや。喋れない。」

「でも私と会話してるじゃない？」

「君は英語、喋ってるんだろ？」

「私の英語は会話には使えない英語。こんな会話できない。」

「でも、英語を喋っているよ。」

「あなたこそ、日本語喋ってるじゃない。」

「おかしい……」と同時に2人で呟いた。「立っていないで座つたら？」と自分の家に人を招いたように気楽にソファを指差した。正直に従う私……コートを脱いでカバンを傍に置くと私はクラーク氏から一番遠い位置に腰掛けた。

「いつ、引越してきたの？」と質問を試してみた。

「今日。」

「私は1ヶ月前。」

「撮影で外に出てたから、やっと今日、我が家に入ったんだよ。」

「だから、会わなかったのか……」

「不動産屋が2人の人間にこの家を紹介したのか……ヤラレタ。」

「でも、ここは日本。」

「イギリスだって。」

「違う。日本。」

「おかしい……」また2人で同時に呟いた。

「何かおかしくないか？」

「おかしい。」

「どんな家？その……君の日本の家。」

「古い洋館。親戚が持っていたんだけど、住む予定もないし、壊すのにもお金がかかるから私が管理する傍らで住むことにしたんです。」

「僕のは普通の家だけど……城でもお屋敷でもないし……君、本当に英語を喋っていないの？」

「そちらこそ、日本語じゃないの？」

「違うよ。」話している彼の口を見てみると、確かに発している日本語と同じように動いているように見えない。英語喋っているみたい。

「Five って言ってみてもらえます？」耳には「ご」って聞こえたけど、口の形は『FIVE』と見えた。

「聞こえている音が・・・日本語なんだ・・・」

「口の形を見たの？」

「そう。」

「なんなんだ。これは・・・」クラーク氏は当惑顔で呟いた。

「本当に君は日本に住んでいるの？」

「そう。イギリスに入ったことないし・・・今も仕事から帰ってきたばかり。」

「僕はここに帰ってくる前に近くの確かにイギリス人が経営するグロサリーストアで買い物をしてきた。」2人で顔を見合わせて、黙り込んでしまった。

「何なんだ？」それは私が聞きたい。

「さあ・・・ちよつと家の中を見回ってみますか？それとも外に出てみる？日本ですよ。外。」

「よし、そうしよう。」2人して連れ立って玄関に出ようとリビングから一歩出たところで・・・クラーク氏がいなくなった。確かに傍にいたはずなのに。あれ？と夢？と思って、リビングに戻ってみたら・・・クラーク氏も当惑顔で立っていた。

「君、今 消えたでしょ？」

「いましたよ。クラークさんこそ消えたでしょ？」

「何なんだ・・・これは・・・君が見えるのはリビングだけ？君は実在なのか？」

「私は実在の人間です。日本に住んでいるの。そっちこそ、本当の人？幽霊？」

「よし、じゃ台所に行ってみよう。」台所はリビングに隣接して

いる。ドアを通って台所に入った。続いてクラーク氏も入ってきた。
「台所では、君が見えるようだね。」

「ほんと。私もクラークさんのこと見える。」

「他に部屋はあるの？その・・・君の家には？」

「私の寝室と隣接しているウォークインクローゼットと、客用の使
つていない部屋が3つ、あと書斎みたいなのと浴室とトイレ。」

「よし、寝室に行ってみよう。」リビングから出た途端にクラーク
氏はまた消えていた。2階の自分の部屋のドアを開けると・・・い
た。当惑顔のクラーク氏が。そのほかの部屋も試してみたのだが、
確実にクラーク氏と会うのは、リビング、台所、寝室と決めている
場所と客用の寝室の一部屋だけということがわかった。

「取り合えず・・・リビングに戻ろう。」リビングに戻っても、
別に問題解決したわけではない。ヘンな状況は続いている。おかし
い・・・この家おかしいよ。

「今、何時？」

「22時。日本時間ね。」

「こつちも22時だよ。イギリス時間の」なんだ、時間もおかしい？
「飲まないといられない・・・」と呟くと、クラーク氏も賛成
と呟いて、2人で台所に入った。冷蔵庫を開けて、双方が取ったビ
ールは・・・冷蔵庫はねじれていないらしい日本製とイギリス製
のビールが並んでおいてあった。

「おかしいと思ったんだ。なんか見たことがないビールが冷蔵庫に
入っているから・・・」とクラーク氏が呟いた。ソファに座って
暫く黙ってビールを飲んでいた。ちよつと、家の話題から離れたか
ったのかクラーク氏が私の名前を聞いていた。

「岡本多諸です。日本人。仕事はコンピュータ関係。」

「僕は・・・」

「Daniel Clarkさんでしょ？ちよつとだけ知ってる。」

「ちよつとだけね。」

「そう。」

「腹が減った。何か食べる?」とごくごく普通のことを聞いてきた。
「冷凍庫にピザがあります。」と言って、現状の大問題は置いておいて、実作業に集中することにした。

「皿は?」

「食器棚。」

「ああ、このブルーのね。」

「違うよ。白。私は白い皿しか持ってない。」

「でもこれ、僕が買ったブルーの……」確かにブルーの皿を持っていた。

「あゝもう、何もかもゴチャゴチャ!共用しているものもあれば、違うものもあるしいゝ!何これ!」と私はかんしゃくを起こした。
「ビール、飲みなよ。」と言って、なだめる口調でクラーク氏は自分が買ってきたギネスを差し出した。

「ありがとう。」

「どういたしました。」ビールを飲んで、大判のピザを無言で食べた。先に声を発したのはクラーク氏だった。

「どうする?これから?」

「わ……私は他の家を探す気ないです。ここに住むつもり。だって、私、この家のこと気に入ってるし。」

「ヘンな家だけど?」

「そう。ゆくゆくは、この家を買おうと思ってる。」

「僕も動く気ないよ。買ったばかりだし。ここは便利だし。もちろん、日本で便利かどうか知らないけど、少なくとも僕の地元では便利な場所だし。」双方、動く気はないということを表明しあった。

「………とすると?」

「………とすると……」

「同居みたいになるぞ。」と眉間に皺を寄せて、このイギリス人俳優は思い切り憂鬱そうに呟いた。

「共有部分はモノがゴチャゴチャのまま?この冷蔵庫みたいに?食器棚みたいに?」と私も呆然と呟いた。

「君が住み続けるなら、しょうがない。」 違っだろ？それは・・・
イギリス人！あんたが住み続ける限りだ！

「・・・・とにかく、私は動きませんから！ビール、ご馳走様！」
と言い捨てて、寝室に引き上げた。ノックの音がする。外でイギリス人が何か言っていた。

「ちよつと入れてくれないか？僕の寝室でもあるんだぞ。」

「ここは私のベッドしかないんです！だから、あなたの寝室じゃないでしょ？」

「寝室の予定なんだ。」

「違う部屋で寝たら？私と会わない部屋はまだあるんでしょう？おやすみ！」と怒鳴り返すと私は布団をかぶって寝たフリをした。

歩み寄り

あれは悪い夢だったんだ……。翌朝、爽やかな11月の冬晴れの土曜日。あゝ眠いなあゝと思いつながらパジャマのままリビングに行ったら……。イギリス人が昨日の通りいた。

「コーヒー飲む？ 勝手に入れたよ。」と特に昨晚のラストシーンを気にしている感じもなく、普通に聞いてきた。彼のほうはどこかに走りにでもいったのか、スポーツウェアで英字新聞を読んでいる。私が不思議そうに見ていると

「忘れた？ 僕はイギリスで生活しているから、外に……。つまりイギリスを走って、帰りにイギリスの新聞を買って帰ってきたというわけだ。」

「はあ……。」と私は ため息とも返事ともつかない声を出した。まだ、この混乱は続いているわけだ。コーヒーをマグカップに注いで、できるだけ彼が座っている場所から遠い場所に座った。

「昨晚は……。疲れていて、ごめんなさい。冷静さが消えました。」と一応謝りの言葉を述べてみた。イギリス人は ちらつとこちらを見て、何も言わないで新聞を読んでいる。

「ちゃんと寝たんですか？」

「……。違う部屋で……。」 でも同じ部屋に寝るわけにはいかないでしょうが！ と思ったが何も言わなかった。

「ベッドはまだ買ってないけど、あの部屋にしようと思っていたんだ。メインベッドルームだから。でも、いいよ。君は一ヶ月前に越してきたんだし。このヘンな現象が収まるまで、あの部屋を使っ
ていても。」 なんか……。ひどい発言じゃない？

「ここは私の家なんだから、どの部屋を使ってもいいはず。あなたの許可は要らないんじゃない？」 今度は先方がムツとしたようだ。

「それは日本での話だろ？」

「あなたのはイギリスでの話でしょ？」 段々、険悪な雰囲気立ち

込めてきたのにお互い気がついた。いい大人が朝から……

「ルールを決めないか？」とイギリス人は提案してきた。

「い……いいわよ。何？」 昨晩はよく寝られなかったから、そんなことを考えていたんだな、イギリス人！

「まず……君はきれい好き？」

「まあ、普通よ。潔癖症じゃない。」

「じゃあ、部屋はどちらかが汚いと思ったたら片付ける。」 普通じゃないの？そんなこと。

「冷蔵庫の中のは、使ってもいいけど、事前に断るか事後に報告する。」 細かいわね、イギリス人。

「最後に……は連れ込まない。」

「え？何？」

「恋人でも、何でもいいけどその類は連れ込まない。いい？」

「友達は？」

「可能な限り避ける。少なくともお互いが家にいるときは呼ばない。」

「そりゃそうだ。こんな眉間に皺が寄った外人がいたら、皆引いてしまう。眉間の皺が消えて、ちよつと笑みを浮かべるとクラーク氏は

「僕は家にいないことも多いから、あまりぶつかることもないと思うよ。まあ、この現象が消えるまでの辛抱だ。」と言った。

「ぶつかるって…… まあ、お互い大人だから暮らしていけるでしょうね。多分。」

「そうだよ。少しは仲良くやっていこう。」 はいはい。あなたのことが好きなファンは大喜びでこの状況を受け入れるでしょうけど、私は憂鬱。でも、しょうがない。仕事をしない週末は、家で本を読んだり ボーツと映画を見たり、溜まった家事を片付けたりしている。今日は天気がいいから洗濯、掃除、寒いから夜はミネストローネでも作るのかな……と考えながらベッドを整えていた。部屋の外でまたイギリス人の声とノックの音が聞こえる。

「……ねえ……使ってもいいかい？」

ドアを開けると、普段着なのか色の落ちたデニムにグレーのスエット、素足のクラーク氏が立っていた。

「何？」

「冷蔵庫の中のバター、使ってもいい？」 部屋の前の廊下はねじれ空間なのか・・・と思いながら

「どうぞ。日本のバターだけど、いい？」と答えた。

「低脂肪？」

「多分。」

「あとさ、サンドイツチ食べる？」

「何の？」

「ハム、チーズ、トマト、あとなんだ・・・ああ適当に葉っぱ。」

歩み寄りのつもりだろうか？無言でいると、

「コーヒーもらったから。」と殊勝なことを言う。

「いただきます。」と無表情に答えて、ドアを閉めようとするのと、ねじれ空間から消えていくクラーク氏を見たのは同時だった。共有空間は昨日確認した場所だけなのか？これからこの空間が広がっていくのかしら？なんで、ここでこんなことが起こっているんだろう？

リビングに下りていくと、クラーク氏が私の白い皿にサンドイツチらしきものを載せて外に出て行くこうとしていた。外には洋館らしく、レンガが敷いてあるだけのデッキがある。そこにガーデンテーブルと椅子を置こうと言うのが私の今のアイデアだ。きつと、格好いいだろう。外に出ると、クラーク氏はイギリスに行くことになるんだろうなあ・・・と思っていたら、デッキの上でサンドイツチをほお張ろうとしている彼がリビングの窓を通して見えた。「あそこも、ねじれてる・・・」私が凝視しているのを背中を感じたのか、口をモグモグさせているクラーク氏が振り向いた。そして、私を確認すると目をむいて空を見上げて大きくため息をつくと（そのように見えた）、また私に背中を向けてしまった。きつと、私と同じことを考えたのだ。ここもねじれているんだ・・・キツチンテー

ブルの上に置いてある私の分のサンドイッチ（ブルーの皿に載っている）を手に取ると、私はリビングのソファに腰掛けてPCの電源を入れた。ニュースのチェック、ブログのアクセス状況のチェック・・・ついでに イギリス人俳優Daniel Clarkについてもサーチしてみた。

「ふーん・・・渋い活動状況・・・イギリスで主に活動つてとこ？離婚歴あり、子供が1人。アンジェリーナ・ジョリーの相手ということ・・・」

「何を見てるの？」 ビックリした。いつの間にか当の本人が後ろに立っていた。

「ニュ・・・ニュースと、自分のブログとか・・・」 あわてて、クラーク氏のバイオグラフィーのページは縮小したけど、見られていた可能性があるな。

「僕はこんな職業だからいろいろな情報がインターネットとかに出てるよ。写真もたくさん出てるし、ファンという人達が僕の映画のイメージで何か作って発表したりとかもしてる。ちゃんと見たことないけど、妙にセクシーなやつとか、変な顔にしたやつとか・・・」

・ 面白い？」 ショービジネスに生きているんだし、公共に顔をさらすのが仕事だからしょうがないけど、ちよつとウンザリという感じなんだろう。

「インターネットを見ないで僕に質問すれば？」 なんか声が冷たいよなあ・・・でも、そうかもね。陰でコソコソ調べるのよりもいいかも「そうね。そうする。サンドイッチありがとう。もう少し、コーヒー飲む？」

「どういたしまして。（コーヒー）もらうよ。」 コーヒーを注ぎ足して改めてソファに座りなおした（お互い昨日よりは少し近い位置に座った）。

「僕の名前はDaniel Clark。1968年3月2日生まれ。今は・・・37歳か。国籍はイギリス。職業は俳優。今は独身。結婚したことがあって、子供が1人いる。別れた前のウィフが

育てている。この職はずっとやってる。イギリスとかアメリカではそこそこ知られていると思うよ。日本でも知られていると思いたいね。君は？」

「私の名前は岡本多諸。1967年9月25日生まれ。今はだから・・・・38歳。国籍は日本。職業はコンピュータエンジニア。この職はずっとやっていて、同じ会社に勤め続けてる。優秀だといわれているし、評価もされている。独身。結婚したことも、同棲したことも ましてや、他人と同居するのも初めて。どう？他に質問は？」
暫く目を宙に泳がせてから

「・・・・・・・・・・特にないよ。君は？」とイギリス人は答えた。
「・・・・・・・・・・私はOffice workerだから月曜日から金曜日は9時〜5時勤務。でも帰ってくるのはずっと遅くて22時とか23時近く。徹夜で仕事があるときは帰宅しないときもあるし、家でも場所はお構いなしで仕事をする。だから私が家で仕事をしているときは邪魔をしないで欲しい。私は静かな環境が好き。たまに口を利くのもイヤなときがある。そんなところかな。」

「わかった。追加でいい？」

「なに？」

「ここは共有空間だろ？」

「そう。」

「だから、ここには仕事を持ち込まない、っていうのをルールにしないか？」

「共有空間全部？」

「そう。もちろん、僕だって本を声に出して読んだりする。それが仕事だから。でも、それはここではやらない。どう？」

「・・・・・・OK。余っている部屋を仕事部屋にするから、ここに書類とかPCとか仕事の類は持ってこない。」

「よし。で・・・・・・僕は明後日からまた、家を空けるよ。10日ほど帰ってこない。」そんなこと、言わないでもいいわよ。別に・・・・・・
・と思ったけど「了解。」と言っておいた。改めて喋ってみると、

非常に大人だ。わがままなことは言わなかったし、冷静に見える。
ヘンな状況だけど、マジメに対処しようという姿勢に好感が持てた。

焚き火

掃除、洗濯・・・・ イギリス人は外出した。共有空間では音楽も制限したほうがいいのかな・・・ テレビ番組はどうしたらいいんだろう？一通り雑用を終わらせて、近くのホームセンターにガーデンチェアの類を見に行ってみた。真冬にそんなものを置いてもサマにならないし、汚れるだけだけど、今日のように晴れている日はすっかり着こんで焚き火でもしたら楽しいのではないか？と思っている。火鉢を大きくしたような陶器製のものが置いてあった。これに炭を入れて燃やしてモノを焼いたり、暖を取ったりするらしい。「いいな〜これ。すぐ使えそう。」と独り言を言いながら、周囲を何回も回ってしまった。共有空間については同居人に相談したほうがいいのかな、とも思ったが、ほとんど家にいない同居人だからいいだろう・・・と思い直して、前から目をつけておいたガーデンチェア、テーブル、その火鉢を買って即配を頼んだ。3時間くらいで配達させますとのことだ。帰宅しても、イギリス人はいなかった。このままいなくなるかもなあ〜とも思いながら、台所のブルーの食器とイギリスビールを確認してしまった。3時間どころか帰宅して30分もたたないうちに全ての品が届いた。梱包を解いて配達のお兄ちゃんに手伝ってもらって組み立てと配置を試みた。レンガのデッキはもう少しきれいにする必要があるかもしれないけど、結構いい感じだ。炭を入れて、苦労しながら火をおこしてみた。「昼飯がわりに、お芋でも焼いてみますか・・・」と独り言を言いながら、アルミホイルに包んだサツマイモを赤々と燃えている炭の傍に置いた。炎をみながら、暫く意識が飛んでしまった。私はこれから、どうなるんだろう？お一人様は結構、気楽。仕事は面白い。無理をしなければ生きていけそう。でも、不安定な世の中であんなく一人きりという寒さが染み入ることがある。笑っちゃうのだが、老夫婦がスーパーで買い物をしていたりするのを見ると、ふうう〜

と思ったりするわけだ。あの人達は、なんだかんだ言いながらも一緒に暮らしてきて、いい仲間、助け合う仲間、たまにム力つく仲間なのかしら？なんていらぬ想像をしたりして。私の家族は両親、兄貴の普通なものだ。でも、私は家族を持たないのだろうか？家族という構成じゃなくても、なにかお互い支えあう相手は要らないのか？若い頃は他人に頼るということを忌み嫌っていたけど、今はそれもいいじゃない？と思うようになった。私はスーパーマンでもないし、ごくごく普通の人間だ。頼ったり、頼られたりして何が悪い？何時までも若い頃の青臭い考えに縛られていていいのだろうか？

「・・・・・・いい匂いだな。何を作ってる？」青い目のイギリス人が傍に立っていた。朝と同じデニムに黒のタートルネックセーター、茶色の革ジャンにごついブーツ、キャップ、マフラーという格好だ。イギリスは寒いのだろうか？

「イギリスは、寒いのか？」

「寒いよ。日本の寒さは知らないけど・・・・この部分（と言って、レンガデッキを踵でコンコンと叩く）は日本かな。」

「そうね。ここは日本かな。だからこの気温は日本の気温。日本の11月の気候でしょうね。」

「そうか・・・・で、焚き火？」

「そう。この家に住むことを決めた時に、このレンガデッキにこんな空間を作ろうと思ってて・・・・」

「朝はなかったな。」

「さっき買ってきた。で、お芋を焼いているの。」

「この匂い？」

「そう。食べる？」

「いただこうか。」ボーっとしているうちに、火が落ちてきた火鉢から火箸でアルミホイルを取り出して芋を二つに割った。

「あ、熱いから、軍手を片方あげる。」と言って軍手ごと焼き芋をクラーク氏に渡した。「どうも。」と言って焼き芋を恐る恐る食

べるイギリス人の姿は結構イケテいた。

「何を笑っている？」と熱い焼き芋で十分に口をきけないクラーク氏が聞いてきた。

「なかなか、面白い光景だと思って。」

「何が？うまいよ、これ。」

「イギリス人、それも俳優が焼き芋を食べているのを初めて見たから。」

「芋くらい食べるよ。僕だって。」とちよつと笑いジワが寄った。

「君だって、火にあたりながら、ブーツとしていて 面白かった。」

「なんで？」

「寛いでいるなあ・・・と思ってさ。この家が好きなんだな。」当然でしょ？という顔をして、

「まあね。一目見て気に入ったの。だから、すぐに住んでみたいと申し入れて・・・。」

「一ヶ月前に引っ越してきた、ってことか。」

「そう。この家、どうやって見つけたの？」

「いろいろと見て回って・・・」そりやそうだろう。見て回るよね。でも、ちよつとクラーク氏の顔が曇っている。なんかまずいことをきいたかな。

「ここがいいと決めたってことね？それで、これからいろいろとセツトアップしようと思っていたんだ？」

「まあ・・・ね。」この話は止めたほうがいいらしいと思った。なんかクラーク氏は他のことに思いを馳せているようだったし。日が翳ってきた。少し風も出てきたようだ。

「寒くなってきたから中にはりませんか？」とどこかに行ってしまうっているイギリス人に聞いた。

「ああ、そうだね。芋、美味かったよ。ありがとう。」

「どういたしまして。」と私は中に入りながら、なんだかまだ、外にいたそうなクラーク氏を残して中に入った。時刻は16時。夕飯の支度をするか・・・でもお芋のせいか満腹だし。「仕事部屋でも

作るかな・・・」と共有空間ではないと思われる1階の空き部屋に入ってしまった。この部屋はリビングの隣でほぼ南東に向いていて、だいたい10畳くらいある。夏は少々暑いかもしれないけど、大丈夫だろう。フローリングの床はワックスをかける必要があると思うだし、誰かが置いていった古い木の机も塗りなおしたほうがいいかもしれない。まずは明日それをやるとしよう。またホームセンターに足を運ばねばならない。そんなことを考えているうち2時間以上経ってしまった。イギリス人はまた外出したようだ。私は、ミネストローネ作成に取り掛かった。

想像して、当ててみてよ。

いつものようにミネストローネは圧力鍋のおかげで美味しく出来上がった。駅前のベーカリーで買ってきたパンも最高。赤ワインも美味しい。iPodはランダムに私の好きな曲を流している。

「ああ、幸せ・・・」 赤ワインを注ぎ足して、ソファにもたれて読みかけの本を開いた。

「これから肉を焼くけど食う？」と台所から声がしてイギリス人が顔を出した。

「わ！びっくりした！」

「そんな、驚くなよ。僕の家台所はそのまま外にも出られるんだ。そこから台所に直接入ってきただけだ。」

「でも、ビックリした・・・」

「この鍋、なに？ お、うまそう。スープ？シチュー？」

「ミネストローネだけど？食べますか？おごりますよ。」

「おごってくれるの？」

「そう。おごり。」

「じゃ、この肉は明日、僕がおごってあげるよ。どう？」（口を見ていたら、Deal?と言っている）

「いいですよ。取引成立ってことで。パンはそこにあるから、適当に切って食べたら？」

「いただき！」なんか、すごい うれしそう。さっきの浮かない顔は消えている。この家、買うときに何か揉めたのかな・・・なんていらないうことを考えながら、読書の続きに入った。台所ではスプーンが皿に触れる音と何か紙をめくる音しかない。1人で食事するのは味気ないかな・・・とワインを舐めながら思った。ちよつと覗いてみるか・・・グラスを持って台所に入ると、イギリス人は食事をしながら本を読んでいた。傍に立っている私に気がつく、スプーンを銜えて本のページを押さえながら無言で（当たり前だ、

口が塞がっているんだから」あの青い目で向かいの椅子を見て

「座ったら？」と合図をした。

「1人で食事をするのは味気なくない？」

「まあ、パーティーとか友達に会う以外は1人でこんな感じで食べるよ。そうだな・・・それから食べる相手が生憎捕まらないときとか・・・」と言って、ちよつと自嘲的に片方だけ笑った。

「あら？俳優と一緒に食べる相手に困らないんじゃない？」

「そんなこと、ないよ。」

「毎日、パーティーとか・・・？」

「そんな毎日ない。酒ばかり飲んでいと思うてるだろ？」

「ショービジネスの世界なんて知らないし。映画のイメージや、華やかなイメージしかない。」

「まあ、そうだろうなあ・・・（喋りながら、モグモグしている）でも、普通の人達だよ。そりや、共演していてもずっと『スター』の仮面を取らない人とか、自然にオーラが出ちゃっていて、それが自然体でどうしようもない人もいるけど、ごくごく普通だよ。もちろん。合う、合わないもあるし。人間が集まればそうなるだろ？」

「そうね。会社の中でも合うとか合わないとかある。男優も女優も家に帰れば普通のお父さんだったり、お母さんだったりするのね。」

「そうそう。飲みすぎて二日酔いとか、カッコ悪いのもあり。彼女にフラレルのもあり・・・」と言ったときのイギリス人の目は家探しの経緯を話していた時と同じに見えた。なんか違うほうを見ている。

「ま、そんな感じだ。うまかったよ！ご馳走さま。君は料理ができる・・・うまいんだな。」

「時間があつて、やる気があれば作るけど、いつもは時間がないから、適当なものを食べている。いつも疲れて帰ってきて・・・ビールかワインを飲んで・・・」

「寝る？」

「そう。毎日同じ。映画スターのように刺激も何もなし。」

「僕のいるところだって、同じだよ。そりゃ、映画が新しく始まるたびに違う人達に囲まれはするけど・・・」

「でも、違う考えやアイデアに触れる機会が多いじゃない？そして、自分が啓発される。とっても刺激的よ。」

「・・・そうだな・・・刺激はあるね。でも作るという作業は地道なことだよ。同じ作業の繰り返しだ。そして、人間同士がぶつかり合う可能性も高い。何をして欲しいのか全く説明できない監督とか、仕切りの悪いスタッフとか、エゴイストの共演者とかに囲まれて・・・イライラしながら何か作っているんだ。でも楽しい事ももちろんある。達成感だってある。君の仕事だって、何か作っているわけだろ？」

「んんんん作っているというか・・・」 まあ確かに新しいシステムとかプロジェクトとかは何かを作る作業なのかもしれない。

「そうかも。何か作ったり、目標に向かってみんなでいろいろやっている。」

「同じさ。」

「そかな。」

「そうだと思うけど？僕の世界の場合は出来上がったものをお披露目するときに派手だったり、俳優とか表に出ている人がヘンな目立ち方をする。それが違うのか？な？」

「・・・インターネットに出ちゃったりとか？ゴシップ欄に出ちゃったりとか？」

「そう。」

「ウンザリ？」

「しょうがない。皆がそんなことに興味があるなら、やらせておけばいい。」

「大人なのね。」

「処世術だよ。この世界にいるんなら、ビーチで水着になっているのが写真になっても、彼女と街中でキスしているのが写真になっても、怒っちゃいけない。」

「うつゝん。私は耐えられそうもない。」

「耐えられない場合は、その好きな世界からサヨナラするか 徹底的に戦うかの二者択一になる。」

「引退かマスコミと全面戦争？」

「そう。でも、辞めたくないし、そんなの耐えられるから、続けている。楽しいんだよ。」とヒタと青い目がこちらを見つめ続けて語っている。なんか、変な感じた。俳優業、好きなのね。面白いので質問を続けた。

「映画と舞台とどっちが好き？」

「両方。それぞれ、違う面白さがある。」

「舞台はやらないの？」

「今は映画が多いね。」

「いつかは戻りたい？」

「そうだね。それに……」

「？」

「作るほうもやってみたい。でも、当分お預けだな。」

「？」

「誰にも言わない？」

「言う相手がいない。」 両方の口角が上がって笑みになった。笑いジワも深くなった。

「そうだな。実はさ、大きな映画の主演になった。まずいことに伝説の男を演じなければならぬ。」

「誰？」

「想像してみてよ（口はguess と発音している）。」

「歴史上の人？」目が笑って違うといっている。

「シリーズものの映画で、今までやっていた人ができなくなったとか？あ！わかった！」 まだ目が笑っていて、言ってみると促した。

「スターウォーズでしょ？まだ続編ができるって……」 アタマを逸らして大笑い。また青い目はこちらを見据えている。間違えたらしい。

「違うよ。でも、近いかもしれない。」

「インディージョーンズ？」

「違う。」

「スーパーマン」

「違う。」

「降参！」

「・・・ダブル・オー・セブン！」

「ええ、本当に？」私がよっぽど意外そうな顔をしていたのだろう。

「本当。ダメか？僕が007じゃ？」

「私・・・シヨーン・コネリーとかピアース・ブロスナンのイメー

ジしか沸かないなあ・・・シヨーン・コネリーのボンドは何か・・・

・野性味があつてすぐに女の人に手を出しちゃう感じ。ロジャー・

ムーアはちよつと年行き過ぎ、ピアース・ブロスナンはまあいいと

思うけど・・・あまり真実味のないスパイ映画って感じかな。面

白いけど。」

「あまり詳しく言えないんだけど、今度のはもう少し・・・なん

ていうのかな・・・悩んで、怒ってというボンドだよ。ちよつと違

う。」

「なるほど・・・」で、金髪で青い目のボンドってことが・・・

今度は私がじつとイギリス人の顔を見ていた。彼の顔からタキシ

ードを着たボンドとか、サイレンサーつきの銃を持ったボンドを想

像してみようと思ったのだ。だめだ。想像できない。第一、焼き芋

食べていたし・・・私が何も言わないので不安になったのか

「僕は自分の007でできてると思うんだけど？」と言って、

ちよつと眉間に皺が寄ってムツとしたような、真剣な顔になった。

「今までのイメージが強すぎて、想像できなかっただけ・・・です。」

「

「・・・そうか・・・分かつ

ていたんだ。今までの人達のイメージで人は見るから・・・

・・・」

「でも、チャレンジするんでしょ？」

「そう。やる。」

「いいもの作ればいいんでしょ。」

「………うん。そうだ。」飲みながら喋っていたから時間が速く過ぎたのか、既に真夜中を過ぎていた。

「部屋に引き上げます。鍋はそのまま置いておいて。皿は……洗っとく。」

「ありがとう。お休み。」と言って、そそくさと自室に引き上げた。なんだか……楽しかった。

ペンキ塗りとステーキと俳優談義

翌朝、起きていたら（私は週末寝坊だ。それくらいの楽しみがあったてもいいだろう？）　　またもや既にコーヒーができていた。誰かがコーヒーを入れてくれるのはいいことだ。でも、イギリス人はいなかった。イギリスのどこかに行っているのだろう。コーヒーを飲みながら、昨日仕事部屋にしようと思っっている部屋に行ったら・・・・クラーク氏が何かやっていた。

「おはよう。寝坊だね。」と床を改めながらこちらを見て言った。
「平日はちゃんと寝てないから、寝ダメ。ところで何をしているの？」

「ここを仕事部屋にどうかと思って・・・」

「え？ダメ。ここは私が仕事部屋にしようと思って・・・」

「ここも共有空間か・・・」　　って、私がいるんだから共有よ！

「ルールだと、共有空間で仕事はしないのよね？」

「そう・・・でも、どこか仕事部屋が欲しい。」

「私も！」

「寝室を譲ったんだから、ここは僕にくれよ。」

「でも！」

「何？」こんな気持ちのいい部屋を明け渡すなんて・・・

「あなたの家のほうが広いんでしょ？他に部屋はないの？」

「ここが一番良さそうだったんだ。」

「でも、私のほうは共有空間ではない部屋は2階の客用寝室しかないんだもの。お願い。他にないの？あなたのイギリスの家に？」

「ふむ・・・」　　君が仕事をするときには僕は使わない。僕が仕事をするときには、君は使わないってのは　どうだ？もちろん、僕は集中しているときは他人のことは気にならないから、一緒にこの部屋にいてもいいけど。」・・・かち合ってもいいのか？

「あなた、本を声に出して読むんでしょ？」

「そうだよ。気になるんだったら、そのときは部屋から出ていけばいい。」 どうせ、隣のリビングにいても聞こえるほど大きな声でぶつぶつ言うんでしょね。

「いいわよ。でも、この床はワックスかけないとだめよ。」

「壁もキレイにしたほうがいい。」 あ、そこまで気がつかなかった・・・

「いいんじゃない？汚い？」

「僕がやる。」 やってくれるんなら、頼もうか。

「じゃ、それで・・・」と言って、イギリス人は出かけて行った。どこに行っただろう？私も、ワックスとか机のペンキとか考えないと・・・またホームセンターに行った。30代後半に突入したい年の女がホームセンターに日参するというのはいかなものだろうか？あの部屋の雰囲気といえば、床はきれいなチェストナット。壁は昔、きっとクリーム色かなにかで落ち着いた感じだったのではないだろうか？机の色はこんな感じかなあ・・・と思って床と同じような色のペンキを買った。家に帰ってみると、既にイギリス人は壁のペンキ塗りに取り掛かっている。

「やったこと、あるの？」

「あるよ。売れない時代はいろんな仕事をした。多分、やり方は覚えてはいるはず・・・」と言いながら、私が想像していたのと同じような白に近いクリーム色に塗っている。一刷毛ぬって、こちらを見ると

「どう？」と聞いてきた。何も言わないでいると、

「気に入らないの？君の家の部屋だよ。意見を言って！」とまた、聞いてきた。

「私が想像していた色、どうしてわかったの？」

「え？こんな感じだって思ったから、これを選んだだけ。床の色とか雰囲気。僕はこの家の外観を見ることができないし・・・大体の感じだよ。で、気に入った？」

「ばつちり。」

「じゃ、手伝つてよ。僕は明日からいないんだから。」なんだよ。私もペンキ塗りをするんじゃないか。結局、日中ずっとペンキ塗りをして（ときどき、ダメ出しがでた）最後まで終わらなかった。壁が一面、残ってしまったのだ。

「ああ、終わらないか・・・」とため息をつくクラーク氏。

「私が残りをやるから、大丈夫。」

「そうだな、君の家だしな。でも、できるのか？」そうよ、私の家。手伝ってくれたのはありがたいけど。

「大丈夫だと思う。」

「僕が帰ってくるまで残しておいてもいいんだぞ。」

「やってみる。」

「だめだったら、途中でもいいから放っておいてくれ・・・ああ、腹減った。」

「そうね。」

「肉、焼くぞ。炭を熾そう。」

「外で焼くの？」

「炭のほぅが美味いだろ？」またもや、苦勞して火を熾して、サラダを作つて・・・

「すごい、いい肉なんじゃないの？これ。」

「普通のステーキ肉。」

「いつも、こんな物食べているの？」

「まさか・・・気が向いた時に買つてきて焼くだけだよ。」つて、1人で食べるのか？彼女とか？とか考えながら炭の上のスキレットが熱くなるのを見ていた。

「ジャガイモ、炭で焼こうか？」と提案してみた。

「いいね。」

「ビールいる？」

「欲しい。」青い目は真剣に火加減を調節している。大丈夫だろうか？将来の007。007は料理もできる男っていう設定なのか？

ジャガイモを半分に切ってアルミホイルに包んだものを適当に炭の中に放り込んで、イギリス人の背中を見ていた。彼は丸首のフィッシャーナマンセータにダウンベストを着て、火の加減を調節している。なんだかなー一昨日、かなり変わった状況、異常な状況で会ってから、今日を含めて3回も一緒に食事をしている。普段、お一人様が多い私としてはかなりの異常事態だ。それも男性と一緒に食事・・・それも俳優・・・それも近いうちに007になるという・・・肉とか芋なんか食っていていいのか？

「ここに座っていると、君はボーツとしてしまうのか？肉焼けたぞ。」

「ありがとう。」今日は風もなく月が雲間から見え隠れしている。火の傍にいれば、外でも食事はできそうな気温だ。

「うまく焼けてる。美味しい・・・」

「肉はちゃんと焼けることを証明できた。」

「あと、コーヒーも入れられるでしょ？」

「そうだな。」

「ペンキも塗れる。」

「そうだ。」

「そして、俳優。いろんな人を演じられる。どんな感じ？自分ではとても好きになれないような人格とか、理解できない人格の人でも演じなければならいんでしょ？どうやるの？」

「難しい質問するね。君はインタビュアーか？」と目じりの皺が深くなって、につこりと笑った。あら、いい笑顔じゃない。イギリス人。

「好きになれない人物については・・・まず好きになれる点を探してみる。また、逆になんで好きになれないのかを考えて、その点が特に目立つのであればそのように真似てみる。理解できない場合は・・・スクリプトをよく読んで、監督がどんな人物を求めているのかも参考にし、自分の考えもいれて作り上げる。」

「時間がかかりそう・・・」

「すぐにわかる役はいいんだけどね・・・難しいと・・・時間かかるな。」

「セリフはどうやって覚えるの？」

「職業だから、アタマに入る。でも、こんなこと言わないというようなセリフの場合はアタマに入らない。何度やってもダメ。」

「どうするの？」

「監督に相談する。こんなこと言わないんじゃないか？とか。」

「意見をしてもいいの？」

「何でも、かんでも言えばいいってもんじゃない。妥当だと思うことは意見を言ってもいいと思う。だって、みんなで作っているから。」

「主役だとモノをいいやすい？」

「う・・・ん。そうかもね。」

「007はどう？」

「秘密。」

「じゃ、聞かない。」

「明日からはすべて007関係で動くことになるなあ・・・」

「役を引きずって家にも帰るの？」

「そんなこと・・・しないようにする。」

「普段はするの？」

「段々、コントロールできるようになってきた。」ははあ・・・昔はできなかったのかしら？

「引きずる役もあれば、そうでないものもあるよ。」

「面白い。」

「そうか？君は仕事を引きずって家に帰ってくるの？」

「そんな時もある。」

「そして、家で仕事をする。」

「楽しくて、止めたくないという理由で仕事をするときと、イヤだけど気になって気持ちの切り替えができないでダラダラと引きずることもあるかな。」

「仕事が好きなんだな。」とクラーク氏は呟いた。

「仕事の好きな女は嫌い？」

「いや……そんな意味じゃない。何か一所懸命になれるものは誰にでも必要だ。」と言って、またどこかに気がそれている。しかし、突然こちらに視点をあわせると急に口調を変えて言った。

「あの部屋……」

「なに？」やつぱり俺にくれ、って言うのかと身構えた。

「いい部屋になるよ。なんか落ち着く。」

「そうだといいね。」

「なるよ。」

「僕がペンキを塗ったから？」

「まあね。明日、早いのかい？」

「8時には家を出るけど？そっちも早いんでしょ？」

「まあ、似たようなもんだ。ワイン飲む？」と言って、イギリス人は立ち上がった。

「あ、昨日飲んじやった。ワイン。」

「買ってきた。」

「じゃ、飲みます。」

「グラスは君のを使っているのか？」律儀だなイギリス人。

「もちろん。」火が弱くなってきた。炭を少し足して炎の勢いを上げてみた。イギリス人は

「寒い？使ったら？」と言いながら、脇に挟んだフリースのひざ掛けを私の膝の上に落とすとグラスをくれた。

「あ、ありがとう。」

「どういたしまして。」

「寒くないの？」

「大丈夫。火、また熾したんだ」

「そう。炎を見てるとなんか暖かいでしょ？」

「そうだな。」お互い、火を見て何も言わない状態が暫く続いただらうか？同時に声を発した

「あのさ。」

「あの……」

「何？」

「そちらから、どうぞ。」

「いや、いい。君は？」

「いい。特に何か言おうと思っていたわけじゃない。」本当は、一緒に食事をしておしゃべりをして楽しいということを言いたかったのだが、止めてしまった。向こうはしょうがなく付き合ってくれているだけだし。

「面白いな。最初はとんでもないことが起こったと思ったけど。」

「面白いって、この家のこと？まだ、続くのかしら？」

「さあ……何が起きているのかわからないけど……お互いの国には足を踏み入れられない。僕は君の家の一部の部屋にしか入れない。君は僕の家には来られない。おかしい。」と片方の口で笑っている。目元はまた笑いジワ。

「あなたの家ってどんな感じ？」彼の家の話はしてはいけないような気がしたけど、聞いてしまった。

「ロンドンの近郊にある一軒屋。すごい古いって話だ。赤レンガで地下室つき2階建て。君のところに通じているメインベッドルーム、リビング、台所、書斎と客室が4つ、浴室、トイレ、クローゼットと庭があつて……。そういえば、庭の感じは少しここに似ている。また、明日からいなくなるから 主がいなかかわいそうな家になっちゃうな。」誰かと住む予定で買ったのか？とうつすら思った。続けて、クラーク氏はちよつと悲しそうに

「こんな感じに人がちゃんと住んでいて、手をかけてやればいい家になると思うんだけど。」と付け加えた。

「私の家のペンキ塗りをしている場合じゃないわね。」

「まあ、おかしいことに君の家と繋がっているから、今日のペンキ塗りも僕の部屋のをやっているのと同じことだ。」

「そうね。」

「そう。ガランとした玄関に入って、リビングのドアを開けるとここに立っているわけだし、ここ2日ほどは非常に食欲をそそる匂いもしていて、幸せな気分だよ。」

「それはよかった・・・」 よかった、よかった、寛いでくれたんだ。グラスのワインもなくなり、時刻は23時近い。寝るか・・・

・
「肉、美味しかった。ワインもご馳走様。今日はいいい運動をしたからゆっくり寝られそう。」

「そうだな。」 火を落として台所に食器の類を片付けて、リビングでイギリス人と向き合った。

「じゃ、10日後に。おやすみ・・・」

「おやすみ。」 何かイギリス人は続けて言いたそうに見えたのは気のせいかな？

なんとなく、安心感。なんとなく、鬱陶しい感。

インターネットのニュースに出ているゴシップを見ないで、直接当人に聞けばいいのだが、今はいないし、この話題は聞いていいのかどうかちょっと考えてしまう。イギリス人が出かけていつて数日後、新007の記者会見があった。大反響だったようだ。それは、いい意味でも悪い意味でも。ネットで動画を見たのだが、なかなかスーツ姿も決まっていた。「お・・・かっこいいじゃん。さすが英国人。」とまた独り言を呟いてしまった。カッコいいけど、やっぱり彼からは007の感じがしなかった。他の人も同じように感じたんだと思う。悪い反響というのは、彼へのパッシングがすぐに始まったことだ。全部を追跡したわけではないが（できるわけではない）、髪と瞳の色が今までの007とは全く違うということが槍玉に上がっていた。金髪、青い目の007は今のところファンには受け入れがたいらしい。歴代のボンドはダーク系の髪と目の色だったし・・・。「つまらないことで・・・いいじゃん。目の色が青でも髪の色が金髪でも。（映画が）できあがってから批評すればいいのに。」とぶつぶつ言っていたら、職場の同僚が「何を見ているのか？」と聞いてきた。007の新しいのができるらしい。というと、まだ続いているんだあと特に関心なく去っていった。まあ、こんな人もいる。映画の主人公が本当に存在するかのごとく恋心を募らせる人もいる。世の中いろいろだ。演じた役柄のイメージでいつまでも見られるのも危険なんだろうな。007はシリーズものだから1作で終わらないで何回か演じることになるだろうか？そうしたら、その役柄が観客に染み付いてしまって、どの映画を見ても007のフィルターがかかってしまわないのだろうか？なんであのイギリス人は007のオファーを受けたんだろう？聞いてみたかった・・・けど、今は時期じゃないんだろうなあ・・・13時になった。うちの会社は始業・終了のベルもないし、昼飯開始・終了の合図もない。会議

が15分後に始まる。007は暫しお預け、さあ、仕事仕事つと。という感じでいつものようにウィークデイが過ぎていった。金曜日の21時。今、帰ってきたところだ。たった3日しか、それもわずかな時間を他人と一緒に過ごしたただけなのに、朝、起きたときや、夜、家に帰ったときに違和感があるのはなぜだろう。真っ暗で寒い家。なんかガランとしている。他人と一緒に暮らすというのはこういうことなのだろうか？なんとなく、安心感。なんとなく、鬱陶しい感。なんとなく……。「ああ、何を考えてるんだ。ワイン飲もうかな。」また独り言を言って、ボトルに残っているワインをグラスに注いだ。「あ、これは007のワインだ。ま、いいか、高いのかしら？」また独り言。作りおきの料理を温めなおしていつものお一人様ディナーを終了させた。さっき何を考えていたんだっけ？なんとなく……何よ。「何よ？」口に出すのは怖いが、心の中には人恋しい感という言葉が浮かんできた。考えていてもしようなないので、週末のプランを考えることにした。ペンキ塗り……ペンキ塗り……他に考えられない。最初は寝付けなかったが、いつものことですのですぐに眠りは訪れた。

大見得切ったが一人でペンキ塗りをするのは大変だった。イギリス人が塗った面と差が出ていないだろうか？土曜日はペンキ塗りで一日過ごし、翌日はまたもや机のペンキ塗りで過ごした。地味だがなかなか創造的な週末だったといえるだろう。夕飯どうしようかなあ……1人だとやはり、何もする気がしない。適当に冷凍庫にあったラザニアの残りを出して暖めなおして食べた。007のワインももう残り少ない。飲んでしまうと、青い目にまた会えないような気がして飲むのを躊躇った。つまらない考えだが、「残しておこうかな……。」と独り言を言って、ボトルに栓をした。いつから縁起を担ぐようになっただろう。

私に決まった相手はいないが、たまに会う相手がいる。既婚者だが気が合う。気が合うという意味は拡大解釈すると、話があう、考えるポイントがあう、体の部分もあっているという意味だ。罪悪感

はない。相手の家族の構成くらいは知っているが興味を持っていないし、全く違う世界のことだと思っている。彼と私がいる世界と彼の家族とは接点がるでないのだ。既にこんなのが5年は続いている。寂しくなったり、惨めな気分になったりしないのか？と思う人もいるかもしれないけど、所謂、昔流行った不倫と言う感覚がないので、自分をかわいそうだとは思わない。でも、この頃思うのだ。彼とは仕事でのキャリアも多分給料もひけを取らないから対等だと思うが、一つだけ私にはなくて、彼が持っているのは自分で作り上げた家族なのではないか？と。自己中心的な考えだ。イギリス人が出かけていって9日目の火曜日にその相手に会った。酒を飲みに行ったのだ。「どう？新しい家は？」と聞かれて、適当な答えしか言えなかった。当然だろう。イギリス人のそこそこ名前の知られた俳優と半分だけ同居しているとは、口が裂けてもいえない。

「快適よ　1人暮らし。」

「いつか招いてくれるの？」

「それはないわね。私のテリトリーだから。」

「そうだな。」この間柄では、お互いの領域は侵さないというのが不文律になっているから、あっさりしたものだ。別れて帰る道すがらちよつと悪女ぶって心の中で呟いてみた。そのテリトリーにあな以外の男性がいるの。ああ、なんてことを考えているんだろう。クラーク氏は10日間家を空けると言っていたから、今日か明日には帰ってくるのだろうか？否、帰ってくるのではなくて　ねじれた場所では会えるのだろうか？

夕飯、一緒に食わないか？

結局、次に青い目に会ったのはその週の金曜日の朝だった。起きて台所に行ってみるとコーヒーができていた。帰ってきたんだ……。単純に 本当に単純にうれしかった。どこにいるのだろう？と思つてペンキの臭いが消えていない書斎に入った。いない……。外？いない……。コーヒーを沸かして、イギリスパートに行つてしまつたらしい。出勤時間が迫っている。準備しないといけない……。コーヒーマグを持って2階に上がった。すると共有部分の廊下（つまり私の寝室の前）にクラーク氏が現れた。

「おかえり……」

「ただいま。」 変な感じだ。こんな挨拶。

「昨日の遅い時間に帰ってきたんだ。もう、寝てると思つて起こさなかった。」 帰っていたら、私に会おうと思つていたのかしら？ 起こしてくれてもよかったんだけど……

「そう。どうだった？仕事？」

「まあまあ……。疲れた。書斎見たよ。きれいに仕上がっているじゃない？」

「ありがとう。いい感じ？まだペンキの臭いがあるけど……」

「いいよ。想像していた通りだよ。ありがとう。」

「……。どういたしまして。」 暫し無言で向き合っていた。何か言わないと……。えゝ

「その格好で寒くないの？」とイギリス人は鼻のアタマを掻きながら照れくさそうに言った。へ？おっと……。半袖のＴシャツにパジャマパンツは色っぽくないが、十分薄着だ。

「あああ！会社に遅れる。じゃね。」と言うと慌てて寝室に入つてボタンと乱暴にドアを閉めた。外で声がしている

「夕飯、一緒に食おう。」 へ？ とまたドアを開けた
「何？」

「夕飯一緒に食おう。」

「どこで？」

「ここで。」

「早く帰ってくるように努力する。20時には家に着くようにする。でも、約束できない。」

「電話してよ。」

「どこに？」

「ここに。」

「電話引いてない。」

「じゃ、ぼくの携帯。」と自分の携帯を見せる。

「国際電話になるね・・・ま、いいか。何番？」言われた番号に試しにかけてみた。かかった。

「君の番号は？」教えた番号でまたテストをして、かかることを確認していたら・・・会社に遅刻した。

会社にいる間、落ち着かなかった。夕飯一緒に食おうって、何を食うつもりなんだろう？作り置きのは、この前のラザニアで終了しているし。時間がないから料理するのは無理だ。早退しようか・・・否、無理だ。まだこれから会議が連荘であるし・・・肉、焼くのか？イギリス人は何が食えるんだ？大事な会議なのに、頭の中は今日の夕飯は何にしようかしら？なんていうことで一杯だ。イギリス人は私が　ぱぱぱぱと料理ができると思っているのか？まっさか・・・そんなことを期待されても困るのだよ。約束できないと言っているから、電話して思い切り遅く帰るか？でも、せっかく久しぶりに一緒に食事ができるのに？一緒に喋って、お酒飲んで、食べるっただけで　すごい楽しかったのに？　しょうがないので、会議と会議の合間に電話をした。

「Yes」やばい。電話だと英語になるのか？

「Ta oです」

「ああ、君か？何？」

「あの・・・日本語でよかった・・・　ああ、あの、今日の夕飯なん

「だけど。」

「作らなくていいよ。」 思い切り見透かされていた。

「へ？」

「イギリスサイドで出来合いを調達するから。君も何か好きなものを買ってくれば？ で、話はそれだけ？それで電話してきたのか？ 仕事は？」

「じゃ、また！」 と言つてあわてて電話を切った。ああ、よかった。日本語で会話が成り立った。

定時に席を立つたので、周囲は少し驚いていた。17時ぴったりに会社を出るなんて・・・普段はない。「私だつて、定時で帰ることくらいあるのよ！」とロビーに下りるエレベーターの中で独り言を言つてしまった。このクセ、何とかならないかなあ・・・ 帰り道、駅ビルをウロウロしたが何を買うのかで迷った。酒のつまみにもなつて・・・イギリスにないもので・・・外人の口に合うもの。結局、鶏肉の唐揚げ、青菜と貝の辛し和え、おこわ・・・ これでいいや。あ、あと日本酒にしよう！ワインも追加しておかないと・・・

リビングと台所、書斎に明かりが点いているのがわかった。ドアを開けるときになぜかドキドキした。リビングに入ると・・・いた、イギリス人が。また、何か本を読んでいた。記者会見のときのスーツとは違つて（当たり前だ。家でスーツを着て寛いでいたら驚きだ）、新しい感じのデニム、白の丸首Ｔシャツ、明るめのブルーのカーディガンを着ていた。

「お帰り」

「た・・・ただいま。適当に食べるものを買つてきた。」

「僕も適当に見繕つてきた。」

「お酒も買ったけど？日本酒とワイン。」とだけ言うと、そそくさと2階に駆け上がった。とりあえず、腕時計とアクセサリーをはずし、化粧を落としてからかなり色の落ちたデニムにグレーのタートルネックを着てピアスだけつけて、1階に下りていった。

「食べようか？」と台所に入りながら言った。

「腹減った。僕はローストポークとマッシュポテト、人参のグラッセ、サラダ、あとワインを大量に仕入れてきたよ。君は飲むからね。」

「私だけが飲んでいるみたいな言い方ね。」

「だって、そうだろ？僕のワインも飲んだら？」

「少しだけ残しておいたけど？」

「飲んじゃえばよかったのに。」なんとなく飲めなかった、飲んだら会えなくなるかもしれないから、とは言えなかった。

「何を飲む？」

「ビール！」

「どっち？」

「日本のビールかな。」と会話をしながら、買ってきた惣菜を皿に移していった。

「仕事中に夕飯の心配をしていたら？」とクラーク氏が茶目つ気たつぷりにビールを手渡しながら聞いてきた。

「だって、何時に帰れるかわからないから料理できないし。」

「君は普段料理をしないのを聞いていたから、最初からこんな感じにしようと思っていたよ。」

「なら、言ってくればよかったのに。」

「失礼。」

「それに、電話したときに英語になるかと思って、身構えました。」

「英語で喋ればよかったのに。」んなこと、できないわよ。

「複雑な話はできません。」

「夕飯の話が複雑？」

「複雑よ。」

「食べるってことは、大事なことからね。複雑にもなるな・・・」
とイギリス人はちよつとからかうように同意した。カラカッてる・・・ム力つく。

「どこで食べるの？」

「リビングでどう？」

「OK。何か音楽をかけていい？」

「いいよ。」ソファーに腰を落ち着けて、ビールを二口くらい飲んだ。

「ああ、おいしい！」

「美味そうに飲むね。」

「だって、金曜日だし、明日は休み！ビールも美味しくなる。」なるほど。

「どうだった？仕事？」辛い話もあるんだろうけど、とりあえず聞いてみた。

「うん（とビールを一口）、いろいろあり過ぎてね。」

「記者会見、見た。」

「見たの？」

「うん。カッコよかったよ。俳優らしい。」

「僕は俳優だよ。」と苦笑い。

「あ、失礼。」

「まあ、いろいろ言う人がいてさ。気にしていたらきりがないんだけどね。」けどね？何？

「007は重いな。歴史がありすぎ。」

「撮影って、始まっているの？」

「まだ。来年の1月からだ。楽しみだ。」そうだね。確かに。

「この鶏肉のフライはうまいね。」

「出来立てはもっと、美味しいと思うよ。」

「作れるの？」

「多分。作れる。」

「こんど、作ってよ。」

「作り方を教えるから、自分で作ってみる？」

「それもいいな。」

「このポークも美味しいよ。」

「どうも。」

「ああああ、私もこんな肉でなんか作ってみたい！」

「日本にもあるだろ？」

「日本の肉は小さい肉ばかり。大きな肉はマーケットで売っていないの。」何を喋っているんだか・・・どうして、そこそこいけている俳優、あ、違った、売れている俳優と豚肉の話をしないといけないんだ？

「いいな、普通の話。どうでもいい話ができて。」とイギリス人がこちらを見て言った。

「そんなに普通？」

「普通。一日の終わりに普通の会話ができるってのはすばらしいことだと思わないか？誰とも話さないで終わるってのもいいかもしれないけど、それだけじゃ味気ない。」

「確かに・・・」私がこのところ考えていたのは、コレだったのかもしれないと思い当たった。一日あったこと、とか取り留めのない話をする。

「そうね。別に何てことない話って、人には必要ね。」

「うん。」暫くお互い無言で音楽しか聞こえなかった。突然、青い目が喋りだした。

「007の記者会見のあと、すごくてね。パッシングが・・・僕の髪の毛とか目の色が気に入らない人、たくさんいるみたいだ。」やっぱりにしているんだ。

「そのせいで、製作に支障が出ないかときにしてる。実は・・・」
「みんなの士気に関わる？でも、そんなパッシングを受けると逆にいいものを作ろうという意識になるかも。」

「そうだな。」

「うん。まあ、それもこれも主役のやる気じゃないの？」 え？それを言うか？という顔をして

「できるだけのことをするよ。」とから揚げを一口。

「アクションシーン、たくさんあるの？」

「ある。」

「傷だらけ？」

「に、なりそうだ。ちよつと立ち回りのリハもやっただけど、腹とか脛とか痣ができた。」

「でも、耐えられるように、体を作るんでしょ？」

「そうだね……。あれが現実だったら普通の人は死んでいると思うけど……。スタントチームのおかげだな……。あんなことをやっても死んだり、怪我したりしないのは……。でも、体は作るんだよ。3ヶ月とか4ヶ月前くらいからトレーナーについて、それらしい体を作り上げる。僕も前よりは筋肉量が増えている。」

「へーいいな。私も体作りしたい。ほら、アンジェリーナ・ジョリーみたいな。腹筋が割れている体」

「君は十分痩せてるじゃないか？」

「痩せているんじゃないくて、筋肉質で強い体ってこと。」

「できるよ。でもキープするのは大変。本当はこんなカロリーの高いものを食べちゃいけないんだけど。」

「大変だね。でもシャリーズ・セロンみたいに太って、ボロボロなジャンキーみたいなのも役であるよね。あれも、準備するの？」

「そうそう。でも、イヤだな……。あれは……。」

「え？そんな役がイヤなの？」

「あの話はあまりにも……。悲しすぎる。」この人はどんな役をやっていきたいんだろう？いつもニヒルな二枚目の感じなのかしら？

「今は、そんな役をやる心境じゃないな……。」ああ、そんな理由なのか。

「007な心境？」

「あんなにアグレッシブじゃないし……。常に何かにイライラもしてないと思うけど。そうだね。ちよつと『俺は冷たい カッコいいスパイ』な心境にはなっているかもしれない。でも、前も言ったように役を引きずってプライベートには入らないと思う。」

「ふーん。」やっぱり、なんかカッコいいこと言っているように聞こえる。私は意地悪な見方をしているのだろうか？役者はやっぱり、

役者。人に見てもらいたい欲求が強いから自分を作るのかしら？ 普段も作っているのかな？ わからない。ビールがなくなった。

「ワイン、飲む？」と聞かれたので、

「飲みますよ！」と即答した。ワイングラスを持ってイギリス人が現れると、意地悪な気分になっている私は質問を微妙に変えた。

「どんな役をやってみたいの？これから？」

「わからない。」

「007はやりたかった役？」

「特に望んではいなかったな。電話がかかってきてビックリ。」

「カッコよくない役もやれる？」段々、顔が真剣になってきた。眉間に皺が寄っている。考えている。

「007をやると、カッコよくない役、難しくなるかもしれないね。」

「畳み掛けるように聞いてみた。ああなんて、意地悪……」

「難しいこと、立て続けに聞くなあ。君がインタビュアーだったら、次回はないかもよ。」

「でも、本当の俳優は真摯に答えると思って。」と更に意地悪をした。

「007を受けるときに、それは考えたよ。そのイメージで一生見られる可能性が非常に高い。評判がよければなお更だし。でも、商業映画の大きいのに主役で出てみたいというのも本音だ。」

「アメリカで成功したい？」

「いい作品で成功したい。007は娯楽大作というイメージがあるし、それはそうなんだけど、違う面からみれば一流が集まって作っている作品でもある。その主役に請われるというのは、非常に光栄なことだと思わないか？」

「そうね。確かに。」素直に頷いてしまった。

「それからもちろん、かつこ悪い役もやれるよ。僕は。殺人鬼も好色漢も請われればやる。」と俳優はポツリと言ってこちらを見ている。私が彼を試したのが分かっているということだ。

「いろいろパッシングもあるし、プレッシャーもあるのに。ごめん

なさい。」

「君だけじゃないよ。そのような質問をするのは。しょうがない。007って各人にすごいイメージがあるし、俳優にとっては諸刃の剣だ。」普通の会話がインタビューになってしまった。悪いこと、した。

「逆に、君に聞いていいか？」

「何？」

「仕事は面白い？」

「そうね〜この道一筋で15年くらい過ごしている。なんだかんだ文句は言っているけれども止めないで続けているのは・・・なんだろう。意地？何かプロジェクトが一つ終わったときの達成感。自分が思った通りに進めて、出来上がりも思った通りのときの『やった！』って感じ。でも、予想していた通りダメな部分も出てきて『ああ、予想通り、しょうがない子』と思いながら火消しもやつたりして・・・」

「すごい、生き生き喋ってるな。」

「今の生活の85%を占めているってことは、それだけ夢中になれるということなんでしょうね。」

「この家にも夢中になっているのに、それが仕事の残りの15%だけ？」

「これから増えていくかもしれないけど、今のところはまだ10%から11%くらい。他の5%とか4%は・・・」

「何にあててる？」

「わからない。」

「でも、何かあるだろう？男、友人、その他の趣味。」

「男はない。その他の趣味は・・・残念ながら・・・なんだろう？」

「そうか・・・」何か続けて聞きたそうな顔をしていたけど、

「そうか。よかったな。好きで夢中になれるものを持っていて。」

というコメントで終了した。意地悪な質問から少し持ち直してくれ

たかな。

「どうして、この家を買ったの？」 イギリス人、急に悲しいような、困った顔になった。ああ、また、ヘンな質問をしてしまった。

「……話すと長い。短くもできるけど。」

「じゃ、短いバージョンで。」

「彼女と住もうと思っていた。で、買った。しかし……」

「？」と話を促した。

「彼女とは……」

「もう、いい。言わなくても。」 後悔した。あまりにも人の感情

を踏みにじっている。ごめんなさい。イギリス人。また、話が途絶えた。BGMはなんだ？これは？レッチリ？バラードだ。

「君はこの家、気に入ったから住んでいると言っていたけど、それだけじゃないだろ？」 痛いところを点いてきた。

「1人になりたかったから。私の家族は円満だけど、取り合えず、1人になりたかった。」 それで？と青い目が言っている。

「わからないけど……自分ひとりで家族が作れるのかを試してみたかった。」

「？」

「よく説明できないけど……私、1人でずっと、十分生きていけると思っていたのね。でも、最近ちょっと違うと思い始めたから、だめだ説明できないや。この家を買って、手入れしているうちに、その考え強くなってきた。人間、1人だけじゃ寂しすぎるかも。」

また、BGMしか聞こえない。

「……そうだな。1人じゃ寂しすぎる。」 これは告白大会なのか？だんだん、そんな様相を呈してきた。

「君は付き合っている人、いないのか？」 何を聞いているんだこの外人は？

「まあ、いろいろあってね。」

「なんだ、それは？」 酔っ払っているのか？このイギリス人は？青い目でこっちを凝視している。

「付き合っていない。そんな人はいない。でも。」
「でも？」

「会っている人はいる。でも、一緒には住めない。」

「それは、止めたほうがいい。」　「なんでよ？あなたに意見される筋合いじゃない。」

「なんで？」

「君が考えている、家族とは違う。」　青い目　プラス　眉間に皺が寄っている。真剣に　『よくない』と言っている。

「わかってる。」

「セックスフレンド？」　「なんで、こう明け透けに聞くかな。」

「それだけじゃない。」

「話、考え方とか合うんだろう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
そう・・ね。」

「止めとけ。」　「わかってるって・・ば。」

「わかってる。この話、続ける？」

「いや。わかってるんだったら・・いいよ。」　「また、BGMタイムだ。暫くワインを舐めるしか、やることがなかった。」

「あなたと、たった3回くらいしか食事をしてないけど、結構楽しく過ごせてよかったなああって思っていたの。」と話を変えた。ほんと？と青い目が言っている。うん。と頷いた。それ以上は言わなかった。

「お腹一杯。お酒ももう飲めないや。眠くなってきたし、今日はお開きにしない？」

「また君と話せてよかったよ。」とイギリス人が返した。

「どういたしまして。」とだけ言って、食器を皿洗い機に入れて残り物を片付けると自室に引き返そうとリビングのドアに体を向けた。
「Tao。」　イギリス人は自分の食器をもって、台所に行きながら私に声をかけた。

「なに？」

「その、会っている奴。どんな奴だ？」何を聞く、イギリス人。

「あなたに関係ないんじゃない？」かなり冷たい言い方だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・いい結果にならない。」

「それは、私が決める。」ああ、また冷たい言い方。それにかなり
険しい目をしていたはずだ。イギリス人の青い目と眉間の皺に負け
ないくらいの。

「そうだな。おせっかいだった。」

「ううん。いいよ。おやすみ。」

「おやすみ。」安全エリア、自分の寝室に引き上げた。

じゃあ、眠くなるまで話そう。

私は逃げたといってもいいかもしれない。その晩、ベッドには早く入ったが寝られなかった。真下のリビングには人のいる気配がする。まだ起きているんだ。イギリス人。「ダメだ。寝られない。」と呟くと、パジャマの上にニットのロングカーディガンを引っ掛けてリビングに行った。青い目はまだソファに腰掛けて本を読んでいる。BGMは私のiPodから流れ続けているようだ。「寝られない。」と呟きながら台所に入った。水のボトルを持ってソファに腰掛けた。イギリス人から遠い位置だ。青い目はこちらをチラッと見て本に視線を戻したまま何を喋らない。暫く、黙ってソファに座っていた。「どうした?」

「寝られない。今、何時?寝ないの?」

「2時。もう少ししたら寝るよ。君は?」

「寝られない。」

「なんで?」

「何でだろう?まあ、いつかは寝られるんじゃない?2階に行くよ。」

「…………ここにいたら?眠くなるまで。」

「?」

「もう少し、喋ろう。」

「…………いいけど…………」また本に目を戻すと区切りのいいところだったのだろうか?青い目は本を閉じてこちらに向き直った。

「俳優って、虚飾の世界に生きていると思うている?」いきなり難しいことを聞いてきた。

「俳優っていう職業の人を知らないから、なんとも言えない。」

「じゃあ、僕は虚飾にまみれているように見える?」

「他のサンプルがないから比較できない。」

「例えば、初めてどこかで会って、喋る機会があったとしよう。そ

して その時、君は僕の職業を知らない。どんな印象をもつ？」

「会った時が・・・今もだけど、異常だったから・・・」

「じゃあ、友好的に食事をして、酒を飲んでいるときは？」

「さつきも言っただけど、楽しい。とても。」

「いい友達になれそうかい？ 職業が何であれ、いい友達になれそう？」私は青い目を見ながら頷いた。「そうね。」

「じゃ、食事をしているとき とか、この家のペンキを塗っているとき、君は僕が虚飾にまみれた俳優とは見てないよね？」

「そうね。」

「だったら、いいんだ。」

「あなたは、私のことを いい友達と思ってくれているの？」

「そうだ。自分でもビックリするくらい君とは素で喋れる。何でも話せるような気がする。」

「おかしいものね。」

「そうか？」不思議そうな顔をされた。007早とちりしていないか？それとも、私はそんなにわかり易いのか？

「君は僕と喋るときに、何か構えている？ 作っている？」作っているか？構えていたか？

「不思議なことに、何も。」そうだ。素で怒っていたし、素で笑っていた。

「最初に会ったときに、激怒した。」

「だろ？ あ、この子は本気で怒って、当惑していると思った。」と言っでイギリス人は笑った。

「あなたのほうは、とても ふてぶてしかったし。不親切に見えたから。」

「この俳優が！ って思ったんだろ？」

「んー 俳優が！とは思わなかった。何？ この男、偉そうに！ とは思ったかな。」

「随分だな。」と笑いが引つ込んだ。

「ごめんなさい。」

「いいんだ。」だって、あなたの眉間に皺が寄った顔、怖いんだもの……

「笑った顔のほうがいいと思う。」

「僕？」

「そう。」

「いつも、笑ってられないよ。」

「まあ、そうだけど……」

「君がボーっとしている顔が、僕は好きだけどね。」

「庭で？」

「とか、この家で寛いでいるとき。」

「それはどうも。バカに見える？」

「いや、安心した顔。厳しい部分が取れて　いい顔になっている。」

「……そりやどうも。」

「どういたしまして。」

「泣いたりすることあるの？」

「僕が？」

「そう。」

「泣きはしないが……どうしようもなく落ち込むことはある。実は、この家に入って　君が帰ってくる前だけど、そうだった。」

「そう……」

「さて、どうするか？　と思っていたんだ。１人で住むには大きすぎる。」

「で、私が帰ってきて、大騒ぎ。」

「そう。大騒ぎ。」

「少しは悲しいことを忘れた？」

「そうだな。君のおかげだ。」

「思い出すことはあるの？」　なんてひどいことを聞いているのかしら？

「……まあ……ね。君は泣くことあるのか？」

「……悲しくて泣くことは少ないかもね。悔しくて泣く

とか……でも……」

「でも？」

「たまに、理由もなく涙が出る時がある。家に1人でいるときとか……3ヶ月に1度くらいね。」と言って、私は照れくさくてちよつと笑つてしまった。

「それは……会っている奴のことを考えて？」

「その人のことを考えてじゃなくて……泣くような付き合いはしていないし。うまく言えないけど、今の全ての状況を考えて急に感情的になるのかもね。」青い目はこちらをじつと見て、理解しようとしているみたいだ。でも、わからないだろうなあ。理屈ナシだから。

「感情の動きは理由がないさ。いつまで考えてもわからないことはわからない。でも、涙が出る。だろ？」

「そうね。」

わかつてるじゃない。伊達に俳優をやつてないわね。

「君はさつき、僕と話をしていて楽しいと言ってくれた。これは理屈なし？」

「そうね。」暫し見詰め合つてしまった。いかん！見詰め合つてどうする？向こうは彼女と別れたばかりで落ち込んでいる男なんだから。寂しい2人で語り合っているだけだ。この空気を何とかしようと思つて、口調を変えていった。

「仲良く暮らしていけそうじゃない？この家の状況はよくわからないけど。」

「そうだな。」と青い目はじつとこちらを見ている。だから！止めてよ。その目。目を離せなくなるから。

「また、明日の午後からいなくなるよ。」

「そう……」

「今度は長い。3週間は帰れない。」

「コーヒーは自分で入れないといけないのね。」ちよつとイギリス人は笑つて

「そうだな。」と答えてまた、じつとこちらを見ている。と、唐突に話題が変わった。

「イギリスの僕の家を見たいと思わないか？」

「そりゃ、見てみたい！でも、私の家からあなたの家には行けないし。」

「行ける場所があると言ったら？」

「！？え？」ニヤツと笑っている。

「あるの？」

「ある。君の家の客用寝室で使っていない部屋が3つあるよね？そのうちの1つは君の家から入れるみたいだ。」

「本当に？」

「見てみる？」と言いながらイギリス人が面白そうにこちらを見ている。

「あなたの家の何の部屋に通じているの？」

「君が僕のほうのメインベッドルームを使っているから・・・変更した僕の寝室。」

「・・・・・・そこにしか行けないの？」寝室かい？

「そう。見る？」うん見てみたい・・・でも、寝室。

「見てみたいでしょ？」

「見せて！」

「いいよ。」リビングから出た瞬間にイギリス人が消えた。2階の私の寝室前でまた現れた。その客用寝室は私の寝室の目前だ。越してきたときに一回チェックして、この青い目と会ったときにもう一回チェックしたはずだけど、また変わったのだろうか？私の家からイギリスサイドにいける？客用寝室のドアを開けると・・・そこは私の知らない部屋だった。知らない家具調度・・・窓はあるが、今は夜だからきつと外は見えないだろう。

「どう？」

「全然知らない部屋。これ、イギリス？」

「だろうね。」窓に近寄った。

「外は暗いからよくわからない。風景は違うの？」

「違うよ。」と私のすぐ傍にイギリス人が立って私を見下ろしている。しょうがない。身長差があるんだから。彼を見上げて聞いてみた。

「どんな風景？」

「とりあえず小さな森が見える。それから花壇。何も植わっていないけど。それから日本の君の家にちよつと似ているデッキ。」

「そうかあ…… 昼間、また見たい。」

「見ればいいよ。」

「勝手に人の寝室には入れないでしょ？日本人のメンタリティとしては……ダメよ。それは。」

「じゃ、僕がいるときにノックして入ればいいじゃないか？」

「見たくなったら、そうする。」目を凝らして外を見たけど、やはり見えるのは暗闇だけだった。窓ガラスに手を当てるととても冷たい。

「外は寒そう。」

「寒いよ。多分、日本よりも寒いはず。」

「そうか……」

「イギリスに君がきたら、この家に泊めてあげるよ。」

「あははは。それはいい考え。あなたが日本にきたら、ここに泊めて差し上げましょう。」

「よろしく。」と言ってまた、じつと イギリス人はこちらを見ている。仕事やプライベートで落ち込み加減の男だ。何か慰めを求めているのかもしれない。そんなこと、考えているんだろうか？でもそれを私に求めるのはダメだよ。イギリス人。お互い気まづくなる時がきつとくるから。それに住んでいる世界が違いすぎる。本当は出会うこともないはずだったんだから。視線を外に戻して言った。「寝られないかと思ったけど…… やっぱり少しは眠る。徹夜はできない年齢なの。」

「僕も寝るよ。」イギリスから出て廊下のわずかな共有空間で俳優と向き合った。

「おやすみ。」

「おやすみ。」明日から3週間会えないんだ。

コミュニケーションは英文メール

土曜日の朝、といつても11時過ぎに起きたら、イギリス人はもういなかった。台所のコーヒーメーカーの傍にメモが置いてあった。さすがに日本語は書けないらしい。英語のメモだ。

『Tao Good Morning. I'll come back three weeks later but it depends on schedule. If you would like to contact me write a message to my e-mail address (Daniel.C@xxxx.x.x.uk) or call. I suppose tel conversation would be English. Take care and work hard. Daniel』

しつかり働けよ・・・か。それは、君だよ。007。と思いながらコーヒーをありがたく飲んだ。3週間かぁ。また、お一人様生活だ。もう師走。12月。世の中は忘年会やらクリスマスやらで盛り上がっているのに、映画制作現場ではそんなものは関係ないのだろうか？それとも、『仕事』とか言っちゃって、新しい彼女とバカンスでも過ごしに行ったのだろうか？どんな風に映画ってできるんだろう？スタントマンが危ないシーンをやるんだろうけど、怪我はないのかしら？痣ができているって言ってたな。さて、今日は何をしよう？やりかけの仕事もあるし、それをするためにはペンキが乾いた部屋の掃除が必要だ。今日は床のワックスがけでもするか・・・何も考えなくて済むようにひたすらワックスがけに集中した。終了したのは19時過ぎ。お一人様の夕食はどうするか・・・昨日の残り物で一杯かな。携帯電話が鳴った。表示を見ると非通知だ。基本的に非通知の電話には出ないのだが、もしかして会社からかもしれないと思って電話に応えた。

「はい。岡本です。どした？何かシステム落ちた？」

「Taο?」ひええ・・・イギリス人だ・・・この家の神通力も通じないのか、英語だ。

「い Yes。Taο speaking。」だめだ。これで会話は終了する。

「Hi. Taο. How are you doing? Now I stay in Bahamas。」

「Bahamas? What time is it now on your end?」

「・・・5AM」

「Why do you call me?」

「No reason. I wonder if I bothered with you。」

「No. I think about today's dinner。」

「A h a h a... OK. Did you read my memo? If you don't talk to me by phone, you can send a message to my address. OK?」これでもゆづくり喋

つてくれているんだろうけど、電話は遠いし聞き取りにくい。なんで朝の5時に電話なんかしてくるんだ？なんで起きているんだ？仕事に集中しろよ。俳優をやっているときは。

「OK. I asked why you call me at 5AM?」

「Why do we need the reason to call? I wake up, call you and say good morning. Just it。」ああ、そうですか・・・朝、起きてすぐにこのテンションの高さ。こいつ、イギリス人じゃなくてアメリカ人だ。

「H u m m m m . OK I understand. Take

care and work hard.”

「Thanks! Bye. Have a nice Sunday!」電話が切れた。非常に一方的だ。何なんだ？まったく。バハマで脳がいつちゃったのだろうか？もてる英語力一杯いっぱい喋ったので、急に疲れが出てきた。ビール飲もう。飲んで一息ついて、考えてみた。なぜ、電話をかけてきたんだろう？直接電話で話しをしたくなければメールでもいい、って言っても、そんな頻繁に連絡をとることもないじゃん。一日、何があつたか報告するとか？夕飯、何を食べたか報告するとか？イギリス人の考えていることはわからん。俳優の考えていることはわからん。

日曜日は仕事をして過ごした。外は生憎の雨だったし。焚き火も何もできない。「寒いな・・・今日のイギリスはどんな天気なんだろう？」イギリス人の部屋に行けば、外が見られるのはわかっていた。でも、奴がいなくてときに部屋に立ち入るのはよくないと思った。007だから、誰かが入ったかどうかわかるようにしてあつたりして・・・髪の毛を抜いてドアに貼り付けているクラーク氏を想像して1人で笑ってしまった。「イギリス、雨だったりして・・・」とまた独り言を言っていた。やっぱり、メールしてみようかな・・・

仕事で散々メールのやり取りをしているのにプライベートのメールアカウントは2週間に1回くらいの間隔でしか見ない。入っているメールはジャンクか広告メールばかりだし。「久しぶりにプライベートからメールをうってみますか・・・」ああ、また独り言。「タイトルは・・・」本文はシンプルに元気か？ということ・・・・英文メールを書き始めて数分で頓挫した。「鬱陶しいな・・・英語。」と独り言。散々苦勞をして、辞書を駆使して、これだけ書いた。

タイトル: Today's Japan weather is

.....

本文： It's rainy Sunday. Though I couldn't do anything at my patio, I really enjoyed rainy season. May I come into your room? To tell you the truth I'm eager to check the weather in England. Take care. Tao. 追伸： Sorry for my bad English.

ああ、自滅。メールを書くことなんてないと思っていたのに、教えてもらったメールアドレスを入れて送信ボタンを押してしまった。適当に食べて（いつも適当だ）、ちよつとワインを舐めながら書斎で本を読んでいた。リビングに移動しなかったのは、PCが書斎にあるからだ。メールを待っている私なんて、なんだかへんだと思うながら、チラチラとPCの画面を見ていた。目がなんとなく本の上つ面を追っているうちに1通未読メールが表示されていた。

タイトル： Sure

本文： Why not? Please check and let me know England weather. And what's your dinner? D.C. P. S. Your English is not bad. It makes sense.

『let me know』って、またメール打つの？ 『not bad』ね。そりやどうも。

2階にあがって、昨日青い目と一緒に入った部屋の前に立った。少し、ドキドキしながら扉を開けた。壁際を探って電気をつけた。部屋の明かりは全体的に暗い。海外にありがちな間接照明だ。昨日は（今朝の早朝だな）わからなかったけど、結構広い部屋。どこかに

通じているドアが更に3つある。一つは洗面所かしら？もう一つは、クローゼット？そして残りはイギリスの家に更に通じているのかもしれない。壁と天井は重厚な感じ。暖炉まである。家がとても古いつて、イギリス人が言っていた通りだ。部屋にあった大きなベッドが一つ（QueenだかKingサイズに見える）とベッドサイドに丸テーブル。その上にランプと数冊の本があった。暖炉の前に読書の椅子が2脚。窓2つ。あ、違う。小さなバルコニーに出るためのガラス張り観音開きのドアだ。「なんて、大きな部屋……」

これは普通の家じゃなくて、お城じゃないの？」昨日見た窓はベッド側にあった。「天気は………つと………」カーテンを少しめくってみた。そうだ。夜だったんだ。でも、月が出ていた。晴れている。白々とした月の光が庭を照らしている。そんなに遠くないところに森らしき影も見える。「天気は晴れで、お月様がきれいです。とてもメールするか……」それにしても大きな部屋。バルコニーに出られるのかな。出たらどうなるんだろう？と誘惑に駆られたが、イギリスから帰ってこれないとまずいしなあ。と思い直して部屋から退散した。ドアを閉めて見慣れた光景が目の前に広がったので、安心した。ホッとため息をついて、1階の書斎に戻ってメールを1通送信して、そのままPCの電源を落とした。

タイトル： England

本文： It's cold but moonlight is
very beautiful. Tao

これで、今日の義務は果たしたような気分になった。またイギリス人の部屋を見てみたいという考えがチラッと浮かんだが、そのまま寝室に入った。明日からお一人様の1週間の始まりだ。

これからどうなるのだろうか？

この1週間はハードだった。システムトラブルに付き合っ、1日徹夜。2日朝帰り。システムトラブル解消後にその後処理（今後の対策をどうするのか？とか、報告書書きとか、会議とか）で通常の仕事ができなかった。結局のところ、週末はその皺寄せで仕事をしていた。当然のことながら、プライベートのメールを見る余裕もなく、そんな気分にもならなかった。日曜日の15時。やつとこのことでベッドを出て、コーヒーを沸かして書斎に入った。会社から帰って帰ってきたPCの電源を入れる。まだ仕事が残っている。できるか・・・あの書類・・・と考えながら、眠くてたまらなかった。この年齢になると徹夜はこたえる。一日寝て回復と言うようにはいかない。人一倍眠いのには耐えられない私は、睡眠不足が続くとめまいが起きる。ああ、この仕事、続けていけるのかしら？20代と同じペースで仕事はできないとこの頃つくづく思う。精神力で体はついていけない。いいなあ。体力的に強い人。精神的に強い人。出世している人は皆、タフだもんなあ。仕事をして、遊んで・・・昨日まで作っていたドキュメントを開いて、コーヒーを飲みながらボーツと画面を眺めていた。何も考えられない。「あああゝだめか。」と呟いて、考えなしにプライベートのPCの電源を入れた。プライベートのメールボックスを開いて、メールをダウンロードした。ジャンク、ジャンク、広告・・・機械的に仕訳をしながら頭の片隅でドキュメントをどのように仕上げるか考えていた。「これもゴミ箱、これもゴミ箱・・・あ、間違えた。」英語タイトルのメールをそのままゴミ箱に移したが、それはジャンクではなかった。イギリス人からだった。タイトルがシンプルすぎて捨ててしまったのだ。

件名： Hi ! Ta o

本文： How are you doing? I cannot hear you. Alive? DC
引っ掛けメールみたいなタイトルだなあ。『生きてる?』って半分死んでるよ。ゴミ箱を見たら、まだ他にも無意識に捨てているメールが2通あった。律儀なイギリス人。

件名： Re: England

本文： Thanks. I suppose England weather is fine but cold. Do you like my room? DC

あなたの部屋が好きかどうかなんて、私には関係ないよ。思ったが、はつきりって、広くて落ち着いていて、うらやましいとは思ってたな。。。。

件名： Schedule

本文： Schedule has changed. I'll return on ●●. DC

へ? ●●日って 再来週の火曜日。帰ってくるのが早くなったのか。イギリス人、短いメールだけど筆めだ。しかしながら・・なんで、帰って来る日をちゃんと連絡するのだろうか? 初手から『10日間留守にする』だの『3週間は戻ってこられない』だの、いち私に言っておく必要はあるのかと思っていたのだが。まあ、半分一緒に住んでいるようなものだから同居人に何か言うのは普通のことなのかもしれないが、家族であつても動向を把握していない人達もいるのに。マメ男ということなんだな。『イギリス・マメ男さま っと』と言って、最後のメールに返信することにした。

件名： An English ready writer

本文： I'm so surprised I've missed your three

letters . I'm so sorry . You are
already writer , aren't you ? T
his week a serious system trou
ble hit my group and me . We ha
d to stay up all two nights . T
oday is Sunday afternoon . I ju
st wake up . Exhausted . . . Any way ,
it's good news that you come
back to our strange place earl
ier than your original schedul
e . See you soon .
Tao

なんか、メールで英語だと行間に何が入っているのかわからない。
言葉の選び方が正しいのかもわからないし、軽く書いているつもり
がそうでもなかったりして。ま、いいか。と思いなおして送信した
コーヒーを更に足して、仕事に戻った。プライベートのPCはつけ
っぱなし。メールボックスも開けっ放しだ。定期的にダウンロード
されるメールをチラチラと横目で見ながら仕事が捗るはずはない。
気が散る。青い目でじっとこつちを見ているイギリス人の映像が頭
に浮かぶ。ついでに眉間に皺も寄せてみた。これからどうなるのだ
ろうか？我々はずっとこんなねじれた空間で共同生活を続けるのだ
ろうか？いつかは終わるときがあるのだろうか、その時に何を感じ
るのだろうか？今、考えたくないが、不安、寂寞、悲しさなどなど、
大泣きする要素がずしりと詰まっている予感がした。「泣くだろ
うなあゝ」たった1ヶ月ちょっとだが、この家とイギリス人の存在
が私には大きくなっていったのだ。私の存在は向こうにとってはどの
程度の大きななんだろう。たくさんの人に囲まれて・・・もちろん
超美人の女優やら、やり手のバリバリキャリアに囲まれて、友達も
多いだろうし。いろいろな人に出会うチャンスは私の数千倍。きっ
と彼が言うところの『普通の話が一日の終わりにできる』人はま

たずぐに見つかるに違いない。すぐに忘れちゃうんだろうなあ。私のことなんか。こんな世界から見たら小さな島国の一般人だもの。まあ、大きさとか嵩とか、そんなものを測るのは止めるか……。人間、やっぱり自分を中心に考えるもの。その時に自分に必要なものを必要なだけGetするものだ。私だって、仕事の場に行ったらイギリス人のことは全く忘れているし、3通のメールもミスってしまったし。「泣いても、すぐいい思い出とかなんとか言って、忘れがちになるんだな。」と呟いて時計を見た。既に20時。だめだ。何か食べないと……。お一人様サンドイッチディナーにビールを準備すると再度仕事に向かった。やっぱり……。捗らなかった。メールは来なかった。

I ' m f i n e .

次の1週間は前週の余波でボロボロだった。眠い、ダルい、やつと
のことで仕事をしているような感じ。おまけに今週末は忘年会を兼
ねた友達飲み会がある。楽しみにしていたが、やはり体が心配だ。

土曜日、有楽町18時集合。女は私を含めて4人。男は5人。皆既
婚者だ。私はこメンバー全員の結婚式に出ている。このメンバーの
中で夫婦になっているのが2組いるから大学の時の出会いから結婚
というのは王道なのだろう。近況報告と思い出話で一次会が盛り上
がり、2次会への全員が繰り出した。メンバーの1人が聞いてきた
「どうよ、この頃？」

「どう？って何が？仕事はめっちゃ忙しいけど、一人暮らしを
始めたし、充実してるよ。」

「違うって。男関係ですよ。聞いているのは！」他の話に夢中にな
っていた他全員が私のほうを一斉に見た。

「どうって言われても・・・」

「まさか、枯れちゃったの？」と男性メンバーの1人がからかい加
減に聞く。それに眉をひそめる奥方。苦笑いして

「枯れちゃいないけど、結婚までする気分にならないってこと。」

「結婚する気なの？」

「わかんないよ。結婚は勢いだ、とか、そのときの状況でなんか結
婚に流れ着いたとか、そんなことを言っていた人、いなかったけ？」
と逆に私が全員を見渡す。

「まあ、そうだけさあ。多諸が結婚しないのはなんとなく、わか
るけど、結婚するとまた面白いこともあるから・・・いいんじゃない
かなあと思ってるね。苦労と未知の楽しさの遭遇だよ。」

「だよ〜面白いとは思っけど・・・」

「独身、紹介しようか？」と男性メンバーの1人。

「売れ残り？」

「違うよ！バリバリかつこいいぞ。」

「男の人のカッコいいはあてにならないから、多諸、気をつけたほうがいいよ。」と女性メンバーの1人が茶々をいれる。

「女の言うかわいいうちの友達も当てにならないよなあ？」と一斉に頷く男性メンバー。こんなに仲がよくても、さすがに青い目のイギリス人のことは話せないだろう。とうとう、寂しくておかしい妄想をみるようになったと思われるのが関の山だ。

「ま、ぼちぼちやって行きますよ。結婚することになったら、皆からがっばりお祝いもらうから、よろしくね。」と言っておいた。三次会に行くと言う皆と別れて終電で帰ってきた。さすがにまだ疲れが残っている。プライベートのPCを立ち上げてメールを起動した。今週は一回もメールをチェックしていない。またジャンクメールの山。それを仕訳していく。今度はミスらないようにしないと……。あった。1通。3日前の日付だ。

件名： Strange but cozy place

本文： Taο, are you OK? I worry
you come down with an illness.
Don't work weekend and take a
rest. Sleep. I'll be our house
on Tuesday. Bye DC

『週末は仕事するな』って言うてもね……。もうしているし。『寝ろ』ってガンガン寝ているし……。病気にはならないよ。でも、フラフラだけど。まあ大丈夫。とりあえず返信した。

件名： I'm fine.

本文： I'm fine. Thanks. Taο

電報メールだなあ。返信しなくてもいいくらい。まあいいか。送信ボタンを押して、台所に行った。もちろんビールを取ってくるためだ。当然でしょ？皆は三次会に言っているんだから、お一人様三

次会をやってもいいつしょ？PCを落とそうと思って書斎に戻ったら、未読メールが一通入っていた。イギリス人からだった。

件名： Really?

本文： You say “I’m fine” but it’s doubtful comment. Are you really fine? DC

人の心配しないで、自分の心配をなさい。あなた、途中でしょ？即座に返信した。

件名： YES. I’m fine.

本文： I’m fine. There is no reason to tell a lie. YES I’M FINE.

Tao

PCを落とした。ビールを飲んだら寝よう。リビングのテレビをつけたら、ショーン・コネリーの007をやっていた。「ロシアより愛を込めて」だ。ショーン・コネリーは今のほうが好きだな……。やっぱり、007よりも「薔薇の名前」以降の彼のほうが好き。「アンタツチャブル」の彼もいいよね……。青い目のイギリス人の007はどうなるんだろう？まあ、職業俳優の心配をしてもしょうがないので、ビールを半分残して寝室に引き上げた。なんとなく寒い……。この家、寒いんだよ。

誰かが心配してくれている

日曜日は、ずっと寝ていた。寒気と頭痛があつたから。『I'm fine.』なんてウソだったな・・・と思いながら、頭痛薬を飲んだ。どこでもらったのか知らないが、風邪をひいたようだ。缶スूपを開けて温め、パンと一緒に食べた。病気もお一人様で治さないといけない。つらいなあ。なんて思いながら、湯たんぽも暖めてベッドに潜り込んだ。熱が何度あつたか？そんなの計ったら、さらに具合が悪くなる。翌日は会社の日だが、午前中は病院に行こうと決めた。

ノックの音がする。

「多緒」と呼びかける声もする。誰だろう？呼びかけているのは？半分目覚めて、現実の世界でノックの音がしているのを確認した。ベッドから出たくない。誰？私は具合が悪いんだから・・・寝かせてよ。「誰？」と苛立ちを隠さない声音で言ったら、

「大丈夫か？」と青い目の声がした。へ？今日は火曜日だったわけ？具合が悪すぎて1日死んでいた？

「大丈夫か？多緒？」とまた声がした。どう答えていいのかかわからなくなっていたら、ドアが開いてイギリス人が顔を見せた。

「大丈夫か？どうしたんだ？あーやっぱり。」

「やっぱり、って何よ？」としわがれ声で答えた。

「『I'm fine.』ってウソじゃないか。部屋から音が聞こえるから仕事に行っていないと思って、声をかけたんだ。」『I'm fine.』の部分だけ何で英語のままで、発音がいいんだらう？なんてどうでもいいことを考えながら、

「風邪みたい。」とだけ言った。青い目は部屋に入ってきてベッドに腰掛けて、こちらをのぞきこんでいる。こんなにボロボロの私を見せるなんて！と思ったけど、もう、どうでもよくなっていた。

「ひどい顔でしょ？」とちよっと笑って見せた。青い目は

「熱は？」と言って、手を額にあてている。

「なんか、熱いな。」

「今日、何曜日？病院に行こうと思っていた。火曜日？」

「違うよ。月曜日だけど、もう 昼だ。」

「会社に電話だけしないと・・・それから病院に行かないと。」

「手伝えることはあるか？」

「・・・・・・ないかも。」とりあえず、会

社に電話して欠勤の連絡をした。その間、イギリス人は台所を探して、紅茶をいれてくれた。

「紅茶でも飲んで。」

「うん。」素直に従う。というか、抗う気力もないのだ。さすが、イギリス人。調子が悪いときは紅茶なのか・・・なんて又、つまらないことを考えていた。こんな様子だったが、とりあえず病院にも行き、注射もし、クスリも貰い、寝ていた。クスリを飲んだせいか、1人でないという安心感のせいか、落ち着いてきた。ボーツとしているが、良くなっているとすら思う。「何時だろう？」と独り言を言った。「22時。」と答える声がする。ベッドから起き上がって、枕にもたれると、そこから遠い場所に知らない椅子が置いてあって、イギリス人が座っていた。なんで、私の部屋にいるのよ？とまず思ったが、口には出さなかった。お礼を言わないといけない。イギリス人は

「よく、寝ていたな。気分は？何か飲む？」と聞いてきた。

「水、ある？」

「待ってて」と言って、イギリス人はちよつと出て行くとペットボトルをもつて戻ってきた。一口飲んで、落ち着いた。

「ありがとう。いろいろ。でも、今日は月曜日でしょ？帰ってくるのは火曜日だったんじゃないの？」

「スケがまた変わった。一日早く帰ってきたんだ。」

「そうか・・・」

「そう。ビックリしたよ。」

「なんで？」

「なんで？つて。寝込んでいたじゃないか？」あゝ眉間に皺が寄ってる。怒ってるのかしら？

「風邪ひいたのよ。」

「わかつているよ。でも、『I'm fine.』つて返事してた
だろ？」

「その時はそうだったのよ。」

「無理するからだ。僕とそんなに変わらない年齢なんだろう？少しは自分の体のことを考えないと！」変わらない年齢だあ？私のほうが年上のはず・・・年長者を敬えよ。

「そうだけど、仕事が忙しくて・・・」

「・・・体壊したらダメだよ。」

「そうだけど。」私は、ボロボロの顔、髪の毛はクシャクシャ、目の下にはクマもできているだろう。彼はいつもさっぱりとした短髪。健康そうだ。

「仕事仲間に迷惑がかかるぞ。体調管理がちゃんとできてないと・・・」

「・・・うん。ごめん。」

「僕も心配した。ちよつと。」

「ちよつと？」

「そう、ちよつと。」と言ってニヤツと笑って続けた。

「だから、一便 早く帰ってきた。」

「ありがとう。」

「どういたしまして。」

「何か食べた？お腹すいていない？」

「病人が他人の飯の心配してどうする？」

「そうだけ。」

「そつちこそ、何か食べたほうがいいと思うよ。スープでも飲むか？さっき台所で見かけたけど。スープくらいなら作れるぞ。」

「・・・うん・・・」イギリス人は部屋から出て行っ

た。一度イギリスパートに戻って台所に行ったのだろうか。ベッドから出て洗面所に行って鏡を見た。あゝすごい顔。全体的に腫れぼったい。髪を梳かして、別のパジャマに着替えてフラフラしながら1階に下りていった。台所で青い目が鍋からスープをすくっていた。私が近くに入るのに気がつくど、

「なんだ、下りてきたのか？寝てろよ。ほれ、スープ。」と言いなから、ボールに入ったスープを差し出した。ボールとスプーンをもつてリビングに移動した。

「あゝまいったあ……。急に調子が悪くなったから、ビックリした。」と言いなからスープを一口。体の中から暖かくなっていく感じた。今まで1人だったけど、近くに誰か人がいるという安心感もある。

「ひどい顔してるでしょ？」

「そうでもないよ。まあ、でも元気いっぱいには見えないね。」

「どうだった？バハマ。」

「暑かった。」

「それだけ？」

「ビールがうまかった。」

「？（それだけ？）」

「海がきれいだった。」

「？（それだけ？）」

「誰かがメールの返信をしてくれないか、チェックをしていた。へ？仕事しに行ったんだろ？仕事の話は？したくないのか？」

「仕事は？」

「ぼちぼち。」

「それはよかった。」今日のイギリス人は口数が少ないようだ。帰ってきたばかりで疲れているのだろう。

「可能なら、明日も休んだほうがいい。」と無表情に言う。

「そちらも、疲れているみたい。」

「まあね。でも、大丈夫。明日、休んだほうがいいぞ。」

「……………うん。」

「多諸？」

「はい？」

「……………薬を飲んで早く寝たほうがいい。」

「……………うん。ありがとう。」

「多諸？」

「はい？」

「なんでもない。」無表情＋眉間に皺。怒ってるなあ。これは。

「メールの返事が遅いから、怒っていますか？」と聞いてみた。

「いや。別に怒っていないよ。」無表情。

「英語がぶつきらばう？」

「いや、ちゃんと理解できた。」無表情。

「じゃ、なんで難しい顔をしているの？」

「僕の普通の顔だよ。」

「でも、怒っているように見えます。」

「怒っているんじゃないくて……………心配している顔だよ。」

「？」

「まあ、ちょっと心配しただけけど。」とまたニヤツとした。

「ごめんなさい。」なんで私は謝っているんだろう。本当に心配してくれているのかしら？

「心配、ですか？」イギリス人はまた無表情で頷いている。いつもの私なら、もう少し反抗的な態度を取っていただろう。『私は大人だし。偶然同居する羽目になったイギリス人に心配されて説教される筋合いではない』と言ってケンカすら売っていたと思う。でも今日は、誰かが心配してくれているということで……………あ、やばい。涙か？涙、見られてないか？青い目から視線を外して、
「寝るね。ありがとう。」と言って立ち上がった。スープボールを台所に下げ、水を持ってリビングを出ようとした。青い目はソファにさっきの状態で座っている。

「多緒？」

「ん？なに？ちゃんと休む。」

「そうだな。おやすみ。」

「おやすみ。」声が震えていなかっただろうか・・・自室に戻った安心感からか涙が止まらなかった。でも、悲しい涙ではない。向かいの部屋のドアが開いて、閉まる音がした。

A r e y o u K i d d i n g ?

翌朝8時半、更に元気になっていた。抗生物質って効くなあ・・・午後から会社に行こうかな・・・などと考えていたら、無表情ブラス眉間皺のイギリス人の映像が浮かんで、その考えはすぐに否定した。本当に怒らせてしまいそうだ。キャンセルするミーティング、その他諸々のスケを考えて憂鬱になりながら会社に電話をした。「ええい、休みだ！勝手にしろ！」と呟いて、顔を洗いに洗面所に行った。元気になったつもりだったが、やはりひどい顔・・・部屋にはまだ、昨日イギリス人が座っていた椅子と読んでいた本が残っていた。スエットに着替えて1階に行った。イギリス人はいない。コーヒーもできていない。まだ寝ているらしい。当然のことながら疲れているんだな。11時になってもイギリス人は現れなかった。また、どこかに行ってしまったのだろうか？風邪が伝染ったりしていないだろうか？コーヒーを飲みながら、段々心配になってきた。ベッドの中で唸っていないだろうか？撮影開始前にいきなり体調不良はまずいだろう。大丈夫か？007。2階に行つて、007の部屋の前で耳をすませて中の音が聞こえるか試してみた。ダメだ何も聞こえない。ノックを試してみたが、応えはない。「あ、そうだ。」私の部屋に残っていた本を返すっていう口実でイギリス人の部屋を覗いてみよう・・・かなり無茶苦茶な理由かもしれないが、そのときは道理が通っていると思った。本をもって、ドアを強めにノックした。

「Mr. Clark?」反応ナシ。

「クラークさん？」反応ナシ。ドアを開けて、少し隙間を開けて静かに閉じた。

「Mr. Clark?」部屋はカーテンが閉まっっていて薄暗い。

「クラークさん？」寝ているらしい。ベッドの掛け布団が膨らんでいる。

「大丈夫？本、置いておくよ。大事なものでしょ？」と言ってドアの方に後じさりした。

「じゃね。」なんて、しまらない挨拶だと思いながら、ドアノブに手をかけた瞬間、ベッドのほうから声がした。

「多緒？」 ひえゝ起きた！

「ご、ごめんなさい。本、私の部屋に置いていったから・・・大事だと思つて。だから・・・」

「眠い・・・今何時？」

「じゅ・・・十一時・・・だけど。」

「そんな時間か・・・寝過ごした。」と言いながらベッドに起き上がった。驚天動地・・・007の寝起き姿。それも上半身裸・・・ありえない。

「部屋に勝手に入つて、ごめん。」と言いながら、慌てて外に出た。誰でも驚くだろう？当然、私だけじゃないはずだ。

「あゝビックリした。」と言いながら書斎に逃げ込み、会社PCとプライベートPCの両方を立ち上げた。出勤しないけど、メールだけはチェックしておかないと・・・メールは溜まっていた。すぐに返信しなければならぬものそうでないものを仕訳して、プライオリティ付けをしながら簡単に返信ができるものから処理をしている。ちよつと文面に詰まったり、対応方法を考えたりしていると、青い目の先ほどの姿が浮かんでくらう。ダメだ、驚きながらもしっかりと見てるし・・・

「ああああああ！また熱出そう！」と独り言を言った途端に

「病気で休みだろ？仕事しているのかい？」と声が近くでした。書斎のドアが開いていて、スエット姿のイギリス人が立っていた。

「うん。ちよつと。今日はメール見るくらいなら大丈夫かと思つて

「

「無理しないほうがいい。」

「うん。コーヒー入ってるよ。」

「わかった。ありがとう。あ、本も。」

「うん。」ここまでの会話は視線を合わせないでやっている。私はPCの画面をさも重要そうに見たままだ。だって・目、合わせられないでしょう？目のやり場に困る。今だって上半身裸の青い目の映像が浮かんでいるのだ。その後、顔をあわせられないから書斎に4時間も籠っていた。その間、2度ほどイギリス人が書斎に入って出て行ったが、お互い無言だ。2人でいて無言でいるというのは今まであまりにない。何か喋っているか食べているか、飲んでいるかなのに。15時頃にイギリス人が書斎に入ってきて、私の机の前に立った。気がついたがまたもや読んでいる書類に気を奪われているふりをして顔も上げなかった。

「多緒？」

「はい？（顔はあげない）」

「腹減らないのかい？」

「うん。大丈夫。」

「何か食べたほうがいいぞ。コーヒーだけだろ？口にしたのは？」

「そうだけど？（顔をあげない）」

「ほら、サンドイッチ食べろよ。」

「ありがとう。そこ、置いておいてくれる？あとで食べる。ありがとう。（顔をあげない。ああ、超失礼な態度）」

「多緒？」と言いながらイギリス人が私の額に手を当てて、こちらをまともに覗き込んだ。視線が合うなんてものじゃない。

「うん？え！？何？」

「熱ないのか？なんか熱いぞ。」そりゃ熱いわよ。007俳優の上半身裸を見ちゃったんだから。その張本人が目の前にいたら、それに手を私の額に当てたら、熱も出るでしょうよ。

「だ、大丈夫。私、仕事に真剣になると体温上がるから。」訳わかんないことを言っている。青い目＋眉間皺はまだ手を額に当てたまま、疑わしいと言う顔をしてこちらを更に強い視線で覗き込んでいる。

「程ほどにしたら？薬も飲んでないだろ？」

「あの、手、どけてくれる？」

「あ、ああ。」と言って手をやつとどかしてくれた。

「ごめんなさい。サンドイッチ、作ってくれたのに。休憩します。」
と言って、サンドイッチに手を伸ばした。一口齧ったら、空腹なのに気がついた。冷たくなつたコーヒーと共に全部食べてしまった。

その間、イギリス人は自分の机（何時運び込んだのか不明）に座つてPC（何時運び込んだのか不明）を見ている。今はインターネット時代だから、仕事のオフアールやスケのやり取りは全部メールとかなんだろうなあ〜と考えた。PCの操作が終わると、さっき私が持っていた本を読み始めた。無言・互いに無言。この状態で3時間経過した。気にならなくなってきた。おかしいことに集中して仕事ができる。あまりにも頻繁にメールのやり取りをしていたので同僚から『本当に風邪で調子が悪いのか？ 出社拒否だけど、仕事だけしているんじゃないか？』というからかいのメールが来たくらいだ。「今日のほうが捗つたな。家で仕事ができたらいいのに・・・」と同じ部屋に人がいるのを忘れて独り言を言った。言った後にイギリス人がいることに気がついた。青い目はこちらをチラッと見てPCに何か入力している。ああ・・・1人きりだと思つていた。失敗・・・

プライベートのPCのマウスが書類を動かしたときに動いたのだらう、スクリーンセーバーになつていたPCの画面が生き返つた。受信ボックスの一番上にイギリス人のメールが入っていた。受信日時は今日の18時過ぎ。さっきPCを操作していたのはこのメールか？

件名: Enough & Finish
本文: I think you work hard though you are ill. Don't you think it's enough? DC

返信した。

件名： Feel good

本文： Thank you for your kindness and help. I enjoyed sandwich es you made. It's really good. I feel good. Yes, I really feel good. Today's work finished.

Tao

イギリス人がPCを操作している。数分してメールが入った。

件名： Dinner

本文： Hungry. Don't you have a light meal with me tonight? If you have another appointment, please go ahead. I'm OK. DC

何？他の用件なんて入ってないわよ。仕事って意味？そっちこそ、何かお約束はないの？

件名： Re: Dinner

本文： I have no appointment. Don't you have an appointment with your girl friends? Tao

意地悪だね。女友達なんて。チラッとイギリス人のほうを見て送信ボタンを押し、書類に目を戻した。メールを受信したのだろう。イギリス人がPCのキーボードをすごい勢いでタイプしている。ちょっとして、メールが受信された。

件名： Are you kidding me?

本文： NO Appointment with my girlfriend tonight. DC

ふーん。と思っていたら、青い目眉間皺が私の机の前に立っていた。
「風邪は治ったみたいだね。」 あゝ怒ってる……
「おかげさまで、あなたのサンドイッチを食べて、元気が出ました。
ありがとう。」

「どういたしまして……熱は？」といって、青い目はまた私の額に手をあてようとした。私は少し身を引いて、その手が届かないようにして

「大丈夫。下がったみたい。ほんと。」と言い張ってみた。
「顔が上気してるよ？」

「大丈夫だって。」だから、眉間に皺を寄せてマジメな顔で見つめないでくれ！大丈夫だから。

「まあ、仕事が一日できたんだから、大丈夫なんだろうね。それに、嫌味なメールも書けたみたいだから。」と苦笑いともとれる顔をして見せた。

「嫌味なんて、そんなこと……」

「君こそ、彼からお見舞いのメールとか貰わなかったのか？連絡したか？」

「しないわよ。関係ないもの。」

「あるだろ？心配させてやれ。」

「だって、彼には何もできないもの。」

「そうか？」

「そうよ。関係ないから。」また、そんな難しい顔して……心配してくれたのは、あなただけよ。

「そいつのことは僕にも関係ないけどね。」当たり前じゃない。急に口調が変わってニツコリ笑うと

「お腹すいただろ？」とイギリス人が言った。

「ええ。何か食べないとね。家に何があったかな……」

「何もなかった。」

「カレー食べられる？日本のカレーだけど。」

「イギリスにはインド人がたくさんいるよ。カレーは食べたことあ

るよ。」

「日本のカレーは日本食。じゃ、レトルトカレーでも食べようか。試してみる?」

「いいよ。それで。」ご飯を超特急モードで炊き、レトルトカレーを暖め、残っている野菜でサラダも作って夕飯になった。イギリス人はまず、カレーの香りに反応。炊き立てのご飯にカレーという日本人の大好きな一品に大感激。

「うまいな。」

「まずまずでしょ?」

「作れる?自分で?」

「作れるよ。簡単。」

「作ってよ。」

「いいけど、今週末ね。」と、また、会話が成り立つようになってきた。

「あ……そうか。」

「どうしたの?」

「今週末はダメだ。」

「仕事?」

「そう。残念だけど、人に呼ばれてる。」ああ、デートね?って、私の考えはそこにしか行かないのかしら。おばさんっぽい。

「まあ、作っておくよ。そうすれば、時間のあるときに食べられるでしょ?」

「……そうだな。」

「魚は食べられるの?」

「大丈夫。でも、生魚は食べたことがない。トライする機会がなかった。」

「てんぷらは?」

「ないんじゃないかな。」

「まあ、日本食もばち食べてみたら?」

「そうだな。」だんだん口数が少なくなってきたぞ。何か考えてい

る。

「あのさ。」空の皿を前にしてイギリス人が問いかけてきた。お替わりか？

「？（なに？）」

「もうすぐ、クリスマスだけど、日本は休み？」

「日本ではクリスマスは通常営業。年末に休み。」

「年末っていつ？」

「うちの会社は12月28日から1月4日までお休み。」

「やたら、短いな。」

「まあ、ねえ、働くの好きだから。」

「イギリスにこないか？」

「へ？」なんで、イギリスに行かねばならないんだろう？

「案内してくれるの？」

「するよ。」

「でも、会っても意思の疎通ができないんじゃない？」

「大丈夫だろ。」

「まあ、この家と同じようにあなたの家もねじれている空間があるから。そこなら話せるね。」

「そう。どう？」と青い目が少し照れたように笑って聞いてきた。

「仕事は？ないの？」

「ないことはない。でも本格的な撮影は1月末から始まる。どう？うれしいような、困ったような。」

「行けないことは・・・ない。けど・・・」

「けど？」

「なんか変な感じだね。」

「日本の友達をイギリスに呼んで何か問題あるか？」あるだろう？君にはパラッチとかついていないのか？今、話題のパッシングさ
れている俳優なのに。

「日本人女子と歩いていて、問題とかないの？」

「ないよ。友達だし。」友達だけどさ・・・

「まあ、私は一般人だから問題はないと思うけど……」

「変装すれば？」ニヤニヤと笑ってイギリス人が言ってきた。

「どんな？」

「金髪の鬘をかぶるとか。」

「からかつてるでしょ？」

「いや……おもしろいなと思って。」

「何が？」

「いや。」

「だから、何が？おもしろいの？」

「金髪、似合うんじゃない？」

「バカにしてる！」と私は言いながら立ち上がって、皿を片付け始めた。青い目も立ち上がって自分の皿を持って流しに近づいてくる。「まあ、鬘はいらないよ。大丈夫。誰も気がつかないよ。」私は青い目のほうを振り返って

「でも、もうそろそろ撮影も始まるし、あなたは話題の俳優だから……」

「いいんだよ。そんなのやらせておけば。気にしていたら、その心配だけで死んでしまうよ。いいじゃないか、友達だろ？」そうなのよ。友達よ。

「……うん。」

「じゃ決まり。確実に休める日を後で教えてくれ。」

「わかった。」と、話が決まってしまった。そして、狭い台所でカリーのルーがついている皿を持ったイギリス人イケ面俳優と私は近距離で向かい合って立っている。その間は皿2枚分。色気も何もない。どうしてフルートグラスを持っているとか、そんなシチュエーションではないのだろう？焼き芋とか……そんなのばかりだ。「クスリ飲んで、寝ることにします。」

「そうだな。おやすみ。」台所から出て行きかけた私に青い目が呼びかけた。

「そうだ。多緒。」

「はい？」

「明日の朝、もし部屋に入ってくるんだったら、ちゃんとノックしてくれよ。どんな格好でいるかわからないよ。」何を言っているんだ！まったく、このイギリス人俳優は！

「ノックもしたし、大きな声で呼びかけもしました！いつも早く起きるのに、起きてこないから心配になっただけです！もう、明日はあなたの部屋には入りません！」

「心配したんだ？」私は、ぐっと詰まってしまった。

「ちよつとね。風邪がうつったかと思ったので。」

「そう？ちよつと心配ね。」俳優はニヤニヤというかニコニコというか笑っている。

「そうよ！ちよつと心配しただけです。おやすみ！」

「ありがとう、心配してくれて。」という声を背中で聞いた。あ、なんで、あれが007なんだ！人のことをカラカッテいる。

「熱が出そう。」とまた独り言を言っ、スエットを脱ぎかけたところでノックの音がした。

「はい？」

「多緒？」

「なに？」ドアを開ける気はない。

「なんですか？」

「熱が出たのか？」

「違うわよ！」

「え？何？」ドアを少し開けてしまった。

「熱が出そうだ・・・と言っただけよ。」

「なんだ、熱が出たのかと思った。」また、ニコツと笑っている。大概の女の人はその顔にやられるんでしょうけど、私は違うわよ！イギリス人！青い目はドア枠に片方の肩を持たせかけて、こちらに顔を近づけると

「ちゃんと休めよ。熱が出るぞ。」と言うと又、私の額に手をあてて　ちよつと驚いた顔（作ってる！）をして

「熱いぞ！」と言った。

「クラークさん！あのね！」

「ごめん。明日は仕事だな。」

「・・・そう。おやすみ。」何度、お休みって言っているんだか・
・・・

「おやすみ。」と言うと、青い目は私の額から手をどけるとそこに軽くキスをして自分の部屋に入っていた。衝撃。それ以外のナニモノでもない。しかしながら、40歳に手が届きそうな女がそんなことで驚いてはいけけない。本当に驚いたが、からかいの続きとしてみることにした。海千山千の007俳優に負けられない。

どんな時に人をからかってやろうと思う？

2日間の病欠明け。昨日は家で仕事をしたが、やっぱり溜まっていた。何が？って仕事だ。今朝は青い目に会っていない。奴（既に奴扱い）が起きる前に出てきてしまったのだ。コーヒーも入れていない。出勤前にスタバで買ったコーヒーと日本人には特大のサンドイッチをオフィスで食べながら7時から仕事をしている女を誰もかわいと思うないだろう。PCを見つめる目が行っちゃっているんじゃないだろうか？何時も一番乗りの上司が おや？と物問いげに横を通り過ぎた。

「おはようございます！」

「風邪、だいじょうぶかあ？」

「はい。」

「でも昨日、バリバリ メールが飛んでたな。」

「すみません。出勤しようと思えばできたんですけど……やっぱり皆に伝染してしまいそうで。」

007に伝染してやればよかった。全く。イギリスに行くべきか迷い始めている。イギリス行きもからかわれているんじゃないだろうか？そんな疑問が沸いてきた。そうだ。からかってるんだ。午前中、会議に集中しすぎて頭痛がしてきた。昼ごはんを後輩と食べているときにちょっと聞いてみた。

「ねえ……ねえ……どんな時に人をからかってやろうと思う？」

「なんすか？いきなり？」

「だからさ、からかってやろう ってどんな時に思う？」

「どんな時っていうか……相手の反応が面白い時とか、楽しい時ですかねえ。俺と女房はお互いによくやりますよ。相手の驚いた顔とか面白いから。」

「驚きすぎて、怒っちゃうことはないの？」

「まあ、たまにありますけど、悪気はないんですけどね。お互い。でも、やっちゃいけない相手にからかいを仕掛けるのはまずいですよね。」

「例えば？」

「（笑）上司とか。」

「まあね。」

「どうしたんです？誰かにからかわれたんですか？で怒っちゃったとか？」

「からかわれて、怒っちゃいけないと思ったんですけど・・・。」

「からかっていい相手だと思って、やったんじゃないんですか？」

「そうか。」

「親しくない人にはやらないっすよ。それに。」

「まあね。」 そんなに親しいか？イギリス人？キスもからかいの一部か？イギリス行きもか？そんなに私の反応が面白いのか？また頭痛がひどくなってきた。食後にアスピリンを飲んで、違う会議に挑んだ。イライラしているのが自分でもわかったが、なんとかまとめて乗り切った。そんなこんなで一日が過ぎていき、ただいまの時刻は21時半。フロアに残っているのはいつもの残業組だけだ。さすがに疲れた。帰ろうと思った矢先に携帯電話が鳴った。

「多緒？」 イギリス人だ。

「はい？まだ仕事中心なんですけど？」 自分でも冷たい声だと思う。

「まだ、帰らないか？」

「もう、帰ります。」 帰るコールをしろっっていうこと？

「夕飯、一緒に食うか？」

「・・・・・・。」

「多緒？」

「あなた、私のことからかってる？」

「え？何？」

「私のこと、カラカッテいるでしょ？」

「何を突然、言い出すんだ？」

「昨日のこと全部！イギリスも何もかも！」もう、頭痛と疲労でプツツン状態だ、私。なんてどこかで冷静に見ている私もいた。

「からかってなんか、いない。」眉間に皺が寄っているのが見えるようだ。

「夕飯、一緒に食うのか？食わないのか？」

「どうぞ、ご自由に食べてください！」と言って電話を切った。すぐにまた電話がかかってきたが、無視した。いつもの相手に酒を飲もうと言って呼び出した。

「なんか、あったのか？」と聞かれたので、むっつりした顔で

「何もないけど、お酒が飲みたかったから。それに忘年会も兼ねてね。」

「なんだ、そうか。てっきり、会いたくなったとかそんなことかと思っただのに。」

「都合よく呼び出すだけで、ごめんなさい。」

「お互い様でしょう？」

「確かに。」顔を見合わせて笑ってしまった。気が楽だ。体の付き合いがなくなっても、このまま喋り仲間のままかもしれない。23時。彼とは軽く抱擁をして別れた。

すごい いいパンチだな

家に入ると、リビングにも台所にも明かりが点いていなかった。イギリス人はいないらしい。冷蔵庫から水を出して、2階の自分の部屋に行きかけた。書斎から明かりが漏れていた。「在宅だったのか」また独り言。ドアの隙間から中をうかがった。いた。机の上の灯りだけつけて、難しい顔でPCを見つめている。

「覗いていないで、中に入ったら？」とイギリス人がPCを見つめたまま言った。声が硬い。眉間に皺。部屋に入って自分の机の椅子に腰掛けて読書灯をつけた。広い書斎にボーツと2つの灯り。私は灯りの外にいる。そして無言。先に口を開いたのはイギリス人。

「からかってなんて いないよ。イギリスの話も何もかも。」
「・・・・・・何もかもって、何？」

「全部。」

「私には、からかっているように見えたけど。」

「確かに 鬘の話は冗談だ。でも、イギリスの話は冗談で言ったのではないし・・・・・・」

「・・・・・・」頭痛がまた、ひどくなってきた。口をきく気にもならない。私が何も言わないので、青い目は席を立ってこちらに近寄ってきた。お互い、眉間に皺。最初に会ったとき以来の陰湿な雰囲気立ち込めている。イギリス人は机に手をつくど、ぐつと身を乗り出して強い口調で

「からかってなんかいな。全部まじめだ。イギリスも何もかも、鬘以外は！」と再度同じ事を言った。当たり前だが、彼は体格がいいので威圧感では負けてしまいそうだ。私もイギリス人の目をまともに見据えて答えた。

「よく、わかったわ。」今度は逆にイギリス人が私に聞いてきた。

「何がわかったんだい!？」

「全部。何もかも。」

「・・・・・・・・」

「前も言ったかもしれないけど、僕は君と喋るの、好きだよ。こんなケンカみたいなのでも。」

「それは、どうも。」

「どういたしまして。」　もうそろそろ、離してくれないだろうか？

「思っただけど。」

「何？」

「僕の周りにはたくさんの人がいて、四六時中喋る機会があるけど、必ずしも楽しい事ばかりじゃない。100%楽しいのは特に『君』と喋っているときかもしれない。きっと、僕は君のことが好きなんだな。」

「それは、どうも・・・・」

「どういたしまして。ところで、君は僕のことを好きではないんだろうか？」え？何を聞いているの？青い目がちよつと笑った感じでこちらを覗きこんでいる。私に何を言わせようとしているんだ？

「・・・・・・・・」

「からかって　なんて　いない。だから、全部　まじめで本当だ。」さつきと同じことを言っている。

「全部？」

「疑りぶかいなあ・・・・」とちよつと　呆れたように天井を仰ぎ見ると、またこちらに視線が戻ってきた。私の手と重なっていた彼の片手が私の頬をなぞっている。

「了解。」

「それだけ？言うことは？」

「・・・・・・・・私・・・・・・・・」

「私は？」

「・・・・・・・・」

「好き？」

「・・・・・・・・」

「ん？」そんな促されても……

「好きなようです。」

「『ようです。』じゃなくて……」 だから、百戦錬磨の相手に素人が対抗するのは無理なんだって……青い目が近づいてくるし……

「好き……そう、好きです。いい？これで？」と言い終わらないうちに口が塞がれていた。暫くして、ちよつと唇が離れて 青い目は叩かれたほうの頬と私の頬を摺り寄せると

「了解」と囁いた。頭痛は消えたけれども、熱が出そうだ。俳優は皆、キスがうまいのだろうか？練習するのかしら？ などとつまらないことをボンヤリと考えていた。疲れていたせいもあるが、体に力が入らない。

「顔、冷やさないと腫れちゃう……」

「うん……でも、今はいい。」と言いながらキスを止めない青い目。力が入らないから、なすがままだ。どうしよう……このままだと この先に進んでしまいそうだ。

「あの、私、風邪が治っていないんだけど？伝染しちゃう。」

「うん……大丈夫。」

「ダメだつて。007は風邪も退治するの？」 笑って、キスを止めると 私の頬を親指でなぞりながら

「面白いことを言うね。多緒は……」と言って やつと開放してくれた。

「顔、氷あてよう。ね？熱を持っている。」と彼の叩かれた頬に手を当てて言った。

「そう？」

「うん。」

「いいパンチだったよ。さすがだな。」

「ごめんなさい。」

「君もなんか熱っぽいぞ。」と額に手をあててイギリス人が言った。そりゃ、そうよ。あんなこと、されたら誰でも熱が出る。

「なんか、熱いな。」急にイギリス人はマジメな顔になると

「何時だ？0時半か。多緒、クスリは？」

「飲んでない。」

「ダメだよ。」

「ダメだよって・・・」2人で台所に行つて、私はクスリ。彼は頬にぬれタオル＋氷の処置をした。

「明日も腫れていたらどうしよう？」

「大丈夫だよ。誰かに聞かれたら『痴話げんかです。』って言うから。」

「・・・ひどい。痴話げんかつて、違うんじゃない？」

「そうかな？」

「意味が違ふと思う。」

「じゃ何？」あ・・・また青い目が迫ってきた・・・

「ね・・・寝ることにする。ごめんなさい。叩いちゃって！」

「大丈夫だつて。」と言いながら、2人してリビングを出た。

イギリスにおいて

リビングを出た途端に1人になり、互いの寝室の前でまた2人になる。変な現象だ。もう2ヶ月近いが、やはりまだ慣れない。私たちは互いの部屋のドア前で向き合って立っていた。我が家のイギリスパートと日本パートに分かれるわけだ。

「多緒？」

「ん？」

「イギリスにおいて。」青い目がマジメな顔で言った。

「年末にね。」青い目は首をかしげて、ちよつと片方で笑うと

「違うよ。」と答えた。

「？」

「着替えたら、イギリスにおいて。」へ？目が丸くなっているに違いない。

「あゝ わからない？」

「わかるけど……」

「YES？」

「……」

「ん？」と青い目が答えを促している。何も答えないで、自室に逃げ込んだ。まさに逃げ込んだと言う表現がピッタリだと思う。いい年して何を戸惑う。洒落た一言とかなんか言えないのだろうか？急展開だ。向こうは普通のペースなんだろうけど。ありえない状況で会って2ヶ月経過していない。私としてはさっきの出来事も驚愕なのに。ドアを背にしているいろいろな考えが浮かんでは消えた。イギリスに行くのか？行かないのか？とりあえず、化粧を落とそう。時計も外そう。いつもしているアクセサリーも外そう。歯を磨いて……

「はい。」

「そんなに驚かなくても……」青い目が全部、言い終わる前に

ドアを開けて、心中に去来するいろいろな言葉や驚きの感情を抑えて、落ち着いた声で答えた。

「驚いた。本当に、掛け値なしで。あまり、私を驚かさないでよ。ありえない状況で偶然会って、2ヶ月経ってないのよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」イギリス人の感情が読めない。

「でも・・・・・・・・」

「？」

「私の部屋、寒いよね。イギリスの部屋は暖かいの？だったら、行く。」

「・・・・・・・・あつたかいよ。保証する。」青い目は笑いジワを作って、また片方だけで笑うと自室に入ってしまった。ドアを閉めて、ドキドキが止まらないか試してみたが、何をやっても（深呼吸とか）ダメだった。岡本多緒、一生一度のきめ台詞だった。まあ、たいした事ないけど。髪の毛を洗っているヒマはない。軽くシャワーを浴びて、化粧を落としてパジャマを着て、上にロングカーデイガンを羽織って準備ができた。全くもって色気はない。子供のお泊り会か？というような姿だ。いいのか？これで？イギリス人？イギリスサイドのドアをノックしたら、「開いているよ。」と声がした。ソロソロとドアを開けて中を覗いた。暖炉に火が入っていた。

「わ、暖炉、使えるの？」

「もちろん。必死で火を熾したよ。」青い目は白のＴシャツにスエットのパンツ姿で暖炉傍の椅子に座っていた。ドアの傍に突っ立つたままだったので、

「その椅子、座ってもいい？」と聞いた。

「どうぞ。足が暖まるよ。」年代モノなのか知らないが、きれいに艶が出ているネコ脚の椅子に座った。対の椅子にイギリス人が座っている。

「顔、どう？」

「別になんともなっていないよ。君の手形もついていないし。」

「人のこと、叩いたことなんてないんだけど・・・・」

「ボーイフレンドとかは？」

「ない。そんなひどい人につきあったこと、ないもの。」

「じゃ、僕は光栄にも、その第一号ということか。」と苦笑い。

「だから……」

「吃驚したから？からかわれている　と思った？」

「条件反射。それに……」

「なに？」

「私は、そんなに軽い女じゃないわよ。って思ったかも。」

「『全部、まじめで本当だ』　って言ったのに？」ちよつと眉間に皺が寄った。

「……聞いていい？」

「何？」

「あなたと、私、偶然会ったときに互いになんか……寂しい状況だった。だから……」

「だから、僕は君のことが好きだと勘違いしているって？」

「そう。かもしれない　って思った。きっと、あなたの周りには……」

「いろいろな人がいる。そりゃ　女優もいる。でも、前も言ったと思うけど、こんな短期間だけど喋ってみて、君のことが好きになっただから　しょうがないだろ？君が泣くときと同じだ。」

「理由なし？」

「そう。」

「わかった。」

「僕も聞いていいかい？」

「何？」

「俳優は嘘つきだと思う？それに浮ついていいると思う？」前も聞かれた質問だ。

「イメージはそうだけど。少なくとも、あなたは違うと思う。」

「僕は自分の仕事にきちんと　取り組んでいる普通の男だよ。」眉間の皺が深くなって、目が更に青くなったような気がした。

「うん。わかっている。」

「本当に？」

「マジメに本当に。」

「了解。じゃ、寝よう。」あっさりとした物言いだ。青い目は立ち上がってさっさとベッドに移動してしまった。

「隣が空いているよ。」と掛け布団をめくった。

「それはどうも。」と言いながら巨大なベッドによじ登った。本当に登るといふ表現がピッタリのサイズだ。

「大きいね。」

「大きすぎだ。」

「あなたが選んだの？」

「まさか。昔からあるベッドのマットレスだけ換えたんだよ。」と言いながら、私の体に手を回している。抱きしめられた。

「なんとなく、体が熱いな。」

「そう？多分、あなたが熱いからじゃない？」

「そうかな？僕のほうに熱があるのかな……多緒？」

「ん？」

「不安？」突然質問するのはやめてくれ……対応不可だ。

「な？何に？いつも、あらゆることに不安を感じてるけど？」

「例えば？」

「いろいろありすぎて、例が出せない。」

「そうか。」

「なんで、そんなことを聞くの？」

「多緒がそう感じていると思ったから。」

「そうね……不安と言えば、この家のねじれているのが何時、元に戻っちゃうのか、不安になったときがある。もう、あなたに会えないかもしれないと思うと不安かも。」

「そうか……多緒？」

「何？」

「この家のヘンなのがなくなっても、会える。」

「本当？」

「マジメに本当だよ。」

「クラークさん？」

「何？」

「私、あなたのこと、大好きみたい。」

「『みたい』じゃなくて、言い切ってくれないか？でも、ありがとう。」

「どういたしまして。あなた、とっても暖かいし。」

「暖房代わりかい？それにしても、いい加減ミスターつきで呼びかけるのはやめてくれないかな？」

「どう呼べばいいの？」

「ファーストネームはダニエルだよ。」

「了解。ダニエル？」

「何？」

「不安と言えば、私、俳優を好きになっていいのかって 不安です。」

「僕の仕事場に魅力的な女性がいて、更に誘惑の機会がたくさんあるから？」

「まあ、誘惑されてもしようがないけど……まあ、その時はしようがないかな……そんなことではなくて、釣り合いが取れないかと思っで。」

「何？それ？」

「あなたは俳優でスターで007。私は普通のオフィスワーカー。釣り合いが取れないでしょ？」青い目は肩肘で体を支えながら起き上がると、私の顔を真上から見下ろして、こんなことを言った。眉間に皺が寄っている。あ、ムツとしている？

「君がどう思うかだ。でも、釣り合いなんて、そんなの大昔の階級制度のある時代みたいなこと言うなよ。僕は貴族じゃないし、ただか俳優だ。いろんなことを言われるかもしれない。ゴシップの大好きな輩はゴマンという。でも、何度も言っているけど、気にして

いたら死んじやうよ。だいたい、目の色と髪の色と身長だけで、やいのやいの、言われるんだから。」

「……………」私は何も言わないですつと彼の目を見ていたら、更に

「時には傷つくけどね……」と付け加えた。私はなんか泣きたい気分になってきていた。この人は一生懸命自分の仕事をやろうとしているけど、こんな職業だからいろいろな雑音もある。誤解されることも 傷つくことも多々あるだろう。精神的にもタフじゃないとやっていけないな。

「泣いてる？」

「ちよつと泣きたい気分。」

「悲しいから？何か辛い？」

「全然、辛くないし、悲しくもない。あなたも大変だなんて思ってるね。」

「この時間に泣きながら寝ると顔が腫れるぞ。」とちよつと笑いなから言うと、キスをしながら涙を舐めとっていく。

「くすぐったいから、止めて。」と言うと、

「くすぐったくないよ。」と返してきた。止めない気だろうか？明日は会社なんですけど？彼の唇は私のほうに移ってきている。

「本当に止めないの？」

「止めて欲しい？」

「どう、言えればいいの？」

「正直に。」

「実は明日は会社なんですが？」

「理由としては弱いけど、君は病人だから、止めようか？止めたくないけど。」意外……だという顔を私がしたのだろう。

「何で、そんな顔をしている？」

「とつても、残念！」

「じゃ、続ける。」

「だめ！残念だけど、ダメ！」

「じゃ、これだけ。」と言って、本当に残念に思わせるようなキスをすると、青い目は私を抱き寄せて深く息をすると
「おやすみ。多緒。いろいろ不安なことはあるかもしれないけど、少なくとも僕とのことは不安材料ゼロだと思っ*て*いいんじゃないか？」と言っ*た*きり黙っ*て*しまった。本当？さしずめ彼が今の私の顔を見たら、眉間に皺ができちゃうに違いない。でも、まあ・・・
そうなんだろう。

無理な相談

目が覚めたのは 6 時だった。この時間に目が覚めるのは微妙だ。もう少し寝ていてもいいかもしれない。でも、起きて早く会社に行くのも一つの手だ。そして早く帰ればいい。できれば・・・だけど。隣の青い目は寝ているようだった。腕は私の体に回しておらず、仰向けでまさに自然体で寝ている。木曜日の朝・・・イギリスはどうなっているんだろう？外はまだ暗いようだ。巨大ベッドを抜け出して窓際に行った。カーテンを少しめくって外を眺めた。モヤがかかっている。窓ガラスに触ると冷たい。フーツと息を吹きかけて曇らせる。人差し指で 『Daniel・Daniel・Daniel』 と書いてみた。ああ、何、乙女チックなことをしているんだろう？いい歳の大人の女が・・・げげ・・・でも、そんな気分だったのだから、しょうがない。いくつになっても、人を好きになるときは こんなものなのだ。青い目を起こさないように、そつとイギリスの部屋を出た。見慣れた廊下と私の部屋のドア。コーヒーを入れて、さつさと用意をしていつもより 1 時間は早く家を出た。

風邪はなぜか完全に抜けていた。集中して仕事ができたし、なぜか異様に気分が盛り上がっていた。これは青い目効果か？恋する女は自然と力が沸いてくるものだろうか？この気分の盛り上がり方が少し怖かった。盛り上がったら、下がる時がくる。その落差が正直いって怖かった。でも、今はその気分のまま行こうと思った。18 時過ぎに会社を出て東京駅のデパ地下で適当に惣菜を買って帰宅した。家は真っ暗で青い目はいなかった。「今日はどこかに行く日だったんだ。」と呟いて、食事をせずに暫く待つてみた。特にメモもなく、連絡もない。私から連絡をしているものだろうか？迷った。仕事中かもしれないし。23 時になった。とうとう 0 時。ワインを舐めながら起きていたが、明日がある身なので「寝るか・・・」

「と又呟いて自室に引き上げた。寝る前に青い目に会えなくて寂しかったのは事実だ。なかなか眠りが訪れず、ベッドの中で寝返りばかりうつっていた。1時。部屋の前に誰かいるのが気配でわかった。青い目だ……。小さなソックがしてドアが少しだけ開いた。抜き足差し足でベッドに近づいてくる。ベッドが軋んで 青い目が座ったのがわかる。『ただいま。』なんて、言うの変な感じだなくても、ただいま。』何か言ったほうがいいだろうか？青い目は私の髪の毛をなでて、頭にキスをした。なかなか、ロマンチックじゃない？青い目。薄く目を開けて、今起きたような顔をして言ってみた。おかえりなさい。」

「起こした？」

「大丈夫。あまりよく寝られなかったから。」

「そうか……。」

「おやすみ。」

「多緒？」

「ん？」

「今日はこっちに来てもいいかい？」目がパツチリと開いてしまった。

「ベッド小さいけど？寝られるかな？」

「そうだな。こっち、来る？」

「ん」

「おいで。」と言うと、イギリス人はベッドから私を抱えあげた。そんなことするか？

「自分で歩けるよ。」

「遅い、もう抱き上げちゃったんだから。」そのまま、日本サイドを出てイギリスサイドに連れて行かれ、巨大ベッドに下ろされた。掛け布団の下に潜り込むと、だんだんと暖かくなってきた。安心したからだろうか？眠くすらなってきた。巨大ベッドに青い目が入ってきた。

「多緒、寝た？」

「ん」

「眠い？」

「なんか、眠くなってきた。」引き寄せられて、抱きしめられた。コットンのＴシャツの肌触りと齒磨き粉のミントの匂いがする。気持ちいい。

「暖かい。気持ちいい。」と言ったら、笑われた。顔は見えていないけど、胸の動きでわかったのだ。

「笑ってる？」

「まあね。」

「でも、気持ちいいから。」

「僕は君が小さいから押しつぶしてしまわないか、心配だ。」

「よく寝られない？」

「いや、こうやって押しつぶしたら、どうなるのか？と考えるときもあるけど。」と言って、私の上にのしかかった。

「く・・・く・・・苦しい。重い！」青い目はクスクスと笑うと体重をかけるのを止めて、昨晚のキスの続きと思われるものを始めた。

「昨日の続き？」と聞いてみた。

「そう。君は昨晚、『残念だけど、止めて』って言ったから。」

「あなたは『残念』って思わなかったの？」

「思ったから、今、続きを始めた。続けてもいい？」

「正直に言っていていい？」

「いいよ。」

「今日は『ダメ』って言わない。」

「了解。」また、俳優はキスがうまくないとダメなのかと思った。聞いたなら、きつと怒るだろうな・・・と思ったから聞かなかったけど。キスを続けながら、パジャマの上をなぞっている。胸、腕、わき腹・・・外腿・・・内腿・・・いつかはパジャマも脱がないといけないのかしら？？背中中の筋肉。どうしてこんなに肉厚（笑）なんだろう？

「背中、筋肉ついているの？」

「007のために鍛えてるから。多緒？」

「ん？」

「自分でパジャマ脱ぎたい？脱がされたい？」何を聞いてくるんだ？この人は？慌てて起き上がると

「じ・自分で脱ぐ。後ろ向いてて！」といって、奴が後ろを向いたのを確認して脱ぎながら

「どうして、そんなこと、聞くの？」

「え？」と振り返ろうとするイギリス人を制しながら聞いた。奴は「聞いたほうがいいかな？」と思ったから。」とまたクスクス笑いをしながら答えてきた。

「からかつてる？」

「ちよつと。」と言われて、ちよつとムツとして後ろ向きになっているイギリス人のＴシャツを無理に脱がせてしまった。イギリス人の裸の背中に体を寄せて耳元で

「どうしてそんなに、私をからかうの？」と聞いてみた。青い目は「君が戸惑う顔、好きだから。」と言いながら私のほうを振り向くと、すっかり裸になっている私を組み敷いてしまった。

「本当は脱いでいる姿も見なかったのに。」

「ダメ。」

「なんで？今は裸なのに？」

「恥ずかしい。」

「君は僕の寝起きの裸、見たじゃないか？」

「偶然見ただけ。」

「本当に？」

「偶然です。」

「ほんと？」

「あなたが起き上がらなきゃ、見ませんでした！」青い目がニヤニヤ笑っている。

「あなたみたいに鍛えて、腹筋が6つになったら見せてあげます。」

「ほんと？でも、いいよ。今でも。」と言ってキスをしながらわき腹を触っている。

「腹筋なんてつけなくていいよ。今のままで。」キスは唇から首筋に移動して・・・もう少して胸に届きそうだ。手がわき腹からその下のほうに移動している。岡本多緒、イギリス人にいい様にされている・・・だから・・・海千山千の青い目には気をつけないと・・・

「好きだ。その声。」今までにないような艶っぽい声で囁かれて、思わず赤くなっただのがわかった。

「声なんて、出してないでしょ？」

「出した。ほら。」と言って、また・・・どこか微妙なところに彼の手があつた。小さく声が出た。「ね？」

「クラークさん！」

「だめだよ。Mr. つきで呼びかけちゃ。好きだ。多緒、その声。」と私の目を見ながら言っている。人が一生懸命耐えているのに・・・

・・・ダメだって、そうやって遊ばないで・・・

「からかってる？」

「まじめ。こんなときに、からかわない。」

「・・・あ・・・」

「その声。」と言いながら私の反応を見ている。青い目をまっすぐに見つめて、イギリス人が何を考えているのか推し量ろうとした。悪戯をしているような目ではなく、優しい目をして私を見返している。

「Daniel・・・私・・・」

「うん？」

「Daniel・・・わたし・・・」

「うん。」私の言いたいことがわかった彼は体勢を少し変えて、中に入ってきた。彼が・・・動いたびに声が出してしまう私がいた。どうしよう、抑えられないのだ。

「多緒。もう、どうしようもないよ。」青い目も目を半ば閉じてい

る。

「ん？」意味がわからない。

「どうしようもなく……く……」

「どうしようもなく……？何？あ、Daniel ダメ。」

「ダメだよ多緒。そんな……」

「何がダメなの？」

「ダメじゃなくて……君……」意味が通じない会話が繰り返されている。

「ヘンな会話……」ちょっと動きが鈍くなって、彼はわたしの額から頬にキスをしながら言った。

「ヘンな会話じゃないよ。」言っている意味がわからない。

「意味が通じない。」

「通じていると思うけど？」と動きが再開された。前よりももっと目指すものがはつきりしているような動きだ。

「意味が通じるように言おうか？」彼がかすれたような声で耳元で囁いている。

「うん……ん……あ……」同意しながらも、必死な私。どこかに行ってしまうそうだったから……

「多緒、僕は今、どうしようもなく感じている。多緒が感じているからだ。ダメだそんなに感じちゃ。もっと多緒の中にいたいのに。」

「どう？わかった？」

「……あ……Daniel……」そんなの無理……あなた、ずるい。あなたがそんなことするから、私はこんなになっているのに……感じちゃダメなんて。」

「多緒……」こんな最中に私たちは喋りすぎだろうか？

彼が私の中からいなくなった後、暫くの間は口を聞かなかったけど、結局私たちは更にベッドの中で喋っていた。

「ねえ、聞いていい？」

「何？」

「感じちゃダメっていうのは無理な相談だと思う。」頭を持たせか

けていたイギリス人の胸が大きく上下している。大笑いだ。

「そんな！笑わないでよ！」

「だって……」と肩肘で起き上がると、私のほうを見て更に吹き出して（失礼ね！）、必死で笑いを止めて、ちよつとだけ まじめな顔を作ってから

「あのね。感じてくれたほうがいいんだけど……」

「けど？」

「何て言ったらいいのかな……（と天井を仰ぎ見て）あゝと……耐えられなかったんだよ。多緒のが気持ち良過ぎて。だから、思わず、そう口走った。」そんなこと、言われたことないし……どんな顔をすればいいのだろう？これは光栄なことなのだろうか？顔、赤くなつてないか？何も言えないし。イギリス人、照れくさそうに笑つて、私の目を覗きこんだ。右手の親指で私の頬をなざると唇を寄せてきた。キスをしながら、こんなことを聞いてくる。

「多緒が感じてくれるのは、とってもいいことだと思う。もっと、あの声が聞きたいんだけど？だめ？」「……私もお好きよ、あなたの声。」

「からかつてる？」

「ほんと。」

「聞かせてあげるよ。多緒が『もう十分』って言つまで。」

結局、朝まで喋つたり、キスしたりで時間が過ぎていった。今は朝6時。

「眠い……でも、起きないと……」

「今日は何曜日？」

「残念ながら金曜日。」

「まだ時間あるんじゃないの？出かけるまで。」

「早く行つて、早く帰ろうと思つて。」

「了解。僕は今日も遅いと思つただけど？」

「そう。じゃ、もう少し ここにしようかな。」

「それが正解。」と言ったきり、お互い無口になった。上下に動く胸に頭を持たせかけてウトウトとした。結局、会社には30分遅刻した。

僕は気長に聞く気だよ。一晩かかっても。

その晩。イギリスサイドの巨大ベッドの中で青い目が聞いてきた。

「来年1月からほとんど家にいられないんだ。撮影が本格的に始まる。いろいろなところに行くけど、主にアメリカにいる。」

「うん。わかってる。」

「だから、年末は一緒に過ごしたいんだけど、どう？行けそうかい？」

「23日から休みを取りました。」

「じゃ、おいで。」

「あの……会話がうまく続かないと思う。言いたいことが、こんなにスラスラ出てこないし、イライラすることもあると思うけど……」

「そうだね。でも、それはそれでオモシロいんじゃない？」

「そうかな……」

「そう、思わないと。」

「あなたのことも、イライラさせちゃうかも。絶対、させちゃう。」

「かもしれないけど、しょうがないじゃないか？」

「そうだけど……」

「今から不安に思ってもしょうがないよ。」ああ、やっぱりうまくいかないや。って青い目に思われるのが不安なのだ。コミュニケーションができるのはこの家だけ。でもこの家がこの力を発揮できるのは何時までなのかわからない。この家がなくなったら、普通の会話すらおぼつかなくなる。どうするの？そうになったら、私たち。

「この家に頼らなくてもいいようにお互いならないとダメだと思うよ。」私の考えを見透かしたように青い眼が言った。

「私の英語？」

「僕の日本語。お互いに。」

「うん。」

「言葉にするのが一番わかるんだけど、言葉にしてもわからないことって、あるよね？理由なしのこととか。そんな部分はお互いを感じるしかないんだよ。だから言葉の問題はあまり深刻に取らなくてもいいと僕は思っている。」

「でも、あなたにいろいろ伝えたいことが これからも出てくるよ。」

「例えば？」

「うーん、普通にきょうあつたこととか 面白かったことか……」

「自分がどんなに“感じている”とか？（苦笑）」

「あ、からかつてる？」

「いや、まじめに。気長に聞くしかない。僕は気長に聞く気だよ。」

「晩かかつても。（苦笑）」

「あ、また……」

「まじめ だって。」聞いてみよう……

「やっぱり、うまく通じないや って、嫌いにならない？」無言。

あ、ムツとしてる？見えないけど、眉間に皺？

「なんてこと、言うんだい？君は……」と起き上がって こちらをじつと見ている。

「その質問、そのまま 君に返すよ。どう？答えられる？」

「嫌いにならない。でも、ちよつと落ち込むかもね。」

「そんなことで、落ち込まない！だいたい、同じ言語で喋っているのに、一生わかり合えない人達ばかりなんだよ。周囲は。」そして、ニツコリと笑って私に覆いかぶさると彼はこう言った。

「君にはしつこいくらいに『好きだ』って言っているけど、本当は違うんだよ。」

「！？何？それ！？」驚く私。ああ、違うんだ。私の勘違い？この家の変換能力の衰え？

「少し意味がね……」と唇が触れる。

「何？」

「違うんだよ。」上唇を噛んでいる。

「何？」

「『愛している』と言うのが正しいかな。」

「ひどい・・・Daniel」

「何が？」

「また、そうやって、人を驚かしている。」

「マジメだよ。」下唇を噛んでいる。

「君のこと、ちょっと驚かしているかもしれないけど、本当のことだよ。君は？」

「え？」

「君は？」唇が離れて、私の目を覗きこんでいる。

「き・み・は？」

「あなたのことが いとおしくて、自分でもどうしようかと思っています。」

「イトオシイって？」 あ、うまく変換できてないみたい。

「Love ってこと。」自分でも信じられないくらい自然に言葉が出てきた。あまりにも彼ののことが好きで、自分から彼のことを引き寄せた。

マジメに本当だよ

そんな、こんなで私は今、イギリスにいる。今は……イギリスの一番良い季節、6月。かなり間をすっ飛ばしてしまったけど。年末年始の休暇中はお互いに家の外では意思の疎通ができずに、大変だった。私は彼の早口英語がわからず、彼は私のつたない英語がわからず……。お互いかなり疲れてしまった。しかし、なんとか乗り切れたのは、この不思議な家のおかげだろう。面白いと思ったこと、あの時はこんなことが言いたかったんだという説明、あれはどういった意味？などを家で復習できたから、互いに思っていたことや考えていたことが確認できてよかったのだ。確かに一致していることも多かったが、同じくらいにへえええ、そんなこと考えてたの？ということもあったのは事実だ。新発見というやつか？で、どうしてイギリスにいるのかというと、こっちに引越したからだ。仕事ももちろん、持ってきた。青い目の家で、というか私の書斎で仕事を続行中だ。日本とイギリスの家の不思議な状態はまだ続いている。どうして引越してきたか？さて、何でだろう？自分でもよくわからないが、そうしたいと思ったからだろう。007の撮影は終了したらしい。11月にワールドプレミアとのこと。全く違う世界の話なので私には関係がないのだが、この前青い目がとんでもないことを言い始めた。

「日本の着物、着るといいんじゃない？あれ、キレイだよね。」

「??」意味わからず……。また言われた。

「多緒は持っているでしょ？着物？」

「持っているけど、未婚女性のすごい若い子が20歳〜25歳の間に着る着物しかないよ。こっちに持ってきていないし、それに一人じゃ着られないし。」

「日本に帰って、買ってくるといいよ。」

「なんで？」

「11月に着るんだよ。」

「11月に何があるの？」何を言っている？という顔をされた。

「ワールドプレミア。」

「何、それ？……からかつてる？」

おつと、眉間に皺が寄った。サイレンサー付きの銃で眉間を撃たれそう。

「まじめ。僕1人で行くってこと？」

「いやあ……私、一般民間人だし……勘弁してほ……」

「ダメ。」

「ダメって……私、あなたと一緒に暮らしているのも内緒なのに。」そうなのだ。不思議にパパラッチにゲットされずにここまで来ている。アジア人の小さいのが彼の周辺にいても誰も使用人くらいにしか思わないだろう。それに私、あまり外に出ないし。ワールドなんとかやら……まずいだろう……それは。会社にも一身上の事情でイギリスに行くと言ってある。誰も、007がその事情の元になっているとは知らないのだ。

「別に内緒にしてないよ。する必要ないし。」

「……」私は内緒にしておいて貰ったほうが都合がいいんだけど……

「なんで、行きたくない？」

「顔が出たら、今の穏やかな生活が一変しそう。」

「そうかもしれないけど、何時かは君も僕と一緒に公の場に出ないといけなくなるよ。それが11月になるかもっと遅くなるか、だよ。」

「確かに、パーティーの誘いなどは引きも切らずにあるのだが、私はその全てを断っていた。だって、彼の世界と私の世界は大きく違うし……でも実は言葉の問題（少しは上達したが、まだまだパーティーなんて！）、それにやっぱり彼と一緒に行動できる女として振舞えるか、周囲がどう見るかなんて、考えてしまうとダメなのだ。そっとしておいて欲しいというのが正直なところ。フラッシュ

ユを浴びるなんて考えただけでも寒気がする。

「イヤ？」

「・・・・・・・・今のままじゃダメなの？」

「これ、見ながら考えておいてくれる？」と小さな箱を取り出して、手渡してくれた。

「何、これ？」

「婚約指輪だけど？」何を事も無げに言うのだ？この人は？

「へ？」よっぽど抜けた顔をしていたと見える。彼は私が言う前に断った。

「マジメに本当の指輪だよ。」とにつこり。ニツコリじゃあないぞ、こら・・・・・・・・こんな大事なものを・・・・・・・・私がなかなか箱を開けようとしないので青い目は

「ちよつと貸して。」と箱を取り戻すとパカツと開けて

「ほら、見てみて。」と差し出した。おっと、これは・・・・・・・・ファイアだ。

「9月でしょ？誕生日。だから、これを選んだんだけど。」馬鹿でかい石ではなく（実際は大きいのか？）清楚で上品な感じの指輪だ。・・・・・・・・

「嫌い？」

「・・・・・・・・素敵・・・・・・・・」

「コレつけて、11月、ダメ？イヤ？」

「・・・・・・・・どう振舞っていいのか・・・・・・・・」

「

「僕だつて緊張するんだ。同じ立場だ。」

「・・・・・・・・戸惑った目をして彼を見つめていたのだろう。青い目は何も言わずにこちらをじつと見ている。これ、婚約指輪だよ。ね。」

「婚約つて？」

「文字通り。」

「・・・・・・・・眉間に皺が寄り始めた。そ

して、何か言おうと口を開きかけたけど又閉じて、私が何か言うのを待っている。

「・・・・・・・・・・」ありがとう。何時、日本に帰ろうかしら？」

「！―え？帰るの？」すごい形相。

「帰っちゃダメ？」

「帰るの？なんで？！―」なんか慌てているけど、どうした？007。

「うん。着物・・・・・・・・指輪に合ったのを選ばないと・・・・・・・・」

「あゝビックリさせないでくれるか？」

「何が？」

「戻ってこないみたいだったじゃあないか？！」

「誰もそんなこと言ってないじゃん。」また、彼は何か言いかけて止めた。口がパクパクするというのはこの状態のことなのかしら？なんてつまらないことを考えてしまった。

「ちよつと貸して。」また、箱を取り戻すと青い眼は私の前に肩膝で膝まずいた。そして、こちらを見上げると箱から指輪を取り出して差し出しながら、こう言った

「多緒、僕と結婚してくれますか？」おお、正式な申し込みはこうやるのか・・・・・・・・

「・・・・・・・・」なんて言ったらいいんだろう？

「マジメに本当だよ。」と彼は付け加えた。よっぽど私が懐疑的な顔をしていたと見える。じゃあ答えはシンプルに・・・・

「はい。これからもよろしく。」彼はこの答えを聞いて、やっとほつとした顔をして

「こちらこそ。」と返しながら、指輪を薬指にセットしてくれた。

後日談

新しい007の連れが日本人だったというニュースは日本でも出た。はつきり言って恥ずかしかった。よせばいいのに青い目は私の指輪のはまっている手をさりげなく、わざとカメラの前に差し出すポーズもやってしまった。

「ねえ、やっぱり、恥ずかしいから、もう ああいうの勘弁して。」と青い目に言ってみた。

「あの指輪も着物も、多緒もバツチリだったよ。多緒、すばらしくきれいだし。それに1人じゃ寂しいじゃないか？これから一緒に来てよ。」と言われた。そう言われちゃうと、弱いんだよね……・慣れるしかないか……スミマセン。おノロケです。

後日談（後書き）

ダニエル・クラークさんの顔は007俳優のDaniel・Craig氏をイメージしてあります。007のワールドプレミアで伴った現在の彼女に少しだけ日本人の血が入っていて（お爺様が日本人とか）、お名前がサツキということで、この話を書きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5191i/>

私たち、ねじれた家で同居しています。

2010年10月8日10時52分発行